

---

# Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

和尚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Babylon 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って〜

### 【Nコード】

N5889X

### 【作者名】

和尚

### 【あらすじ】

世界初の全感覚多人数参加型RPG【Babylon】。その開発チームの一員でもあり、そして生粋のゲーマーでもある男、影山透。

そんな彼が持ち前のリアルラックを発揮し一般テスト公開であるクローズド に当選しログインしたところから物語は始まる。

VRMMO作品。ログアウト不能系デスゲームものです。

主人公はチート能力はありませんが、開発者の知識を駆使しつつ、



## プロローグ（前書き）

和尚と申します。

色々と触発されて書き始めてみます。

拙い文章ですが、よろしく願います。

ご指摘、感想等いただけましたら嬉しいです。

## プロローグ

ニムロデは、もし神が再び地を浸水させることを望むなら、神に復讐してやると言って威嚇した。

水が達しないような高い塔を建てて、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに対する復讐をするというのである。

人々は、神に服するのは奴隷になることだと考えて、ニムロデのこの勧告に熱心に従った。

それで、彼らは塔の建設に着手した。

……そして、塔は予想よりもはるかに早く建った。

ヨセフス 「ユダヤ古代誌」より

ノアの洪水の後、人間はみな、同じ言葉を話していた。

人間は石の代わりにレンガをつくり、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていた。

天まで届く塔のある町を建てて、有名になろうとしたのである。

神は、人間の高慢な企てを知り、心配し、怒った。そして人間の言葉を混乱バラルさせた。

今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベル（混乱）の塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである。

旧約聖書 創世記11より

今回クローズド として発表される全感覚多人数参加型RPG  
Gについて

上沢氏（以下上）：それでは、対談形式で進めさせていただきます。  
今回は開発ディレクターの坂上さんにお越しいただきました。

坂上氏（以下坂）：どうもお久しぶりです、本日はよろしくお  
願います。

上：では、まずは今回の主旨に關しましてご説明させていただきます。  
今回協賛で発表されました、全感覚多人数参加型RPG【Baby  
lon】について、僭越ながら全国の方々を代表させていただきます、  
私にご質問の方させて頂きます。それにしても、すごい反響のよう  
ですね！

坂：はい、おかげさまで（笑）。それだけユーザーの方々お待ち  
望んでいたということでしょう、PCの前に座ってキャラクターを  
操作するというこれまでのものではなく、実際にゲーム内に入って  
プレイするというゲームにですね。

上：ゲームをやっている人間のロマンですからね。私も様々なゲ  
ームをこれまでやらせていただいて、実際2Dの時代から、3Dに  
なり、画面から飛び出すような臨場感あふれるゲームにはまった世  
代ではあるんですが。今回のレベルがやはり違いますから、興奮  
してしまいます。

……ところで、今回クローズド テストが完了し、来月から抽選で当たった方々の試験運用が始まるんですね？ 今後のスケジュールを伺ってもよろしいでしょうか？

坂：ええ、まずはクローズド のため、すべての皆様に体感していただくことはできないのですが、来年の春には、満を持して全国の皆様にお楽しみいただけると思います。

上：私も応募したんですが、当選することができませんでした。早く春がきて欲しいですね。

坂：それは残念でしたね……もっとリアルラック値を上げないと（笑）

上：そこからですか（笑）。では、本題に入らせて頂きました、【Babylon】のシステムの特徴といえば、こういったものになるのでしょうか？

坂：端的に言うと、『言葉』が重要になるRPGですね。

上：言葉、ですか……？

坂：ええ、名前からも推測されるとおり、旧約聖書に出てくる『バベルの塔』をモチーフにしています。上沢さんはご存知ですか？

上：名前は知っていますが、具体的には……不勉強で申し訳ない。

坂：いえいえ、私なんかも今回初めて知った口ですから。開発メンバーにそういう雑学知識に溢れている男がいましたね……余談なんです、そいつは一般応募でクローズド にも参加するみたいで

す。仕事しろよ、と言いたいところですが（笑）。

上：あはは、でも、個人的には気持ちはわかるから止められないでしょ？

坂：そうなんですよね。話がそれましたね……簡単に言うと、昔人間にはひとつの言葉しか無かったそうなんですよ。一つにまとまっていた。

上：ほう。

坂：その時代、神に隷属することを嫌った人間たちが、神に届くような天高くそびえる塔を建設します。そして、その人間の傲慢さに怒った神が、そんな人間の言葉を『混乱』<sup>バベル</sup>させました。その結果、お互いに意思疎通の測れなくなった人間たちは、それまでのように統一することができなくなりました。現在、多種多様な言語が存在するのは、人間の傲慢さを神がさばいた結果なのだから。

上：成程、それで、具体的には今回取り入れられたシステムというのはどのようなものなのでしょう？

坂：世界の中心の街、バベルには、『バベルの塔』が存在します。その100層に辿りつけければ、エンディングとなります。しかしその際ですね、各階層にはそれぞれ封印された言語で読まなければならない『言霊』が存在します。また、封印された『言霊』を開放するまでは話すことのできないNPCも存在します。<sup>ノンプレイヤーキャラクター</sup>『言霊』は街の外の世界に存在するし、ダンジョンの奥に存在する。それらを開放しないと、次の階層には登れません。また、開放することにより、更に世界が広がっていきます。



上：うんうん、それで言葉が重要になるということですか。言葉のわからないNPCもいるというのは面白いですね。開放されるまで何のためのNPCなのかわからないというのも。

坂：そうですね、後は、今回のシステムでは既存のコマンド型やメニュー選択型とは異なり、音声認識システムが採用されています。これは、PCの前に座って操作する鳥瞰型の視点とは異なるからですね

上：確かに、目の前にモンスターがいるのにメニューを開いてる場合じゃないですからね（笑）

坂：その通りです（笑）。ですので、呪文の詠唱であったり、技名の発声が必要になります。そして、特に呪文の詠唱では、特定の言葉をつなぎあわせて自分だけの呪文を生み出すことができます。

上：おお、それは凄い！

坂：フィールドに散らばる『言霊』を開放することに、より強力な技であり呪文が使えるようになります。自由度が高く、各ユーザーが主人公となれるように様々な配慮がなされた設計になっていますね。

それに、今言ったのはあくまで一部で、戦闘だけではなく、鍛冶屋や料理人のような生産職も充実していますので、ただ生活することということも楽しめる作りとなっています。ですから、今回が初めてという方にも敷居は低くなっていますよ。

上：ますます早くやりたくなって来ました。では、内容については後は実際にプレイするまでのお楽しみとしまして（笑） 話は変わりますが、今回は安全面についても指摘がなされていました

のへんに関してもコメントを頂けますでしょうか？

坂：やはり世界初、ということとでそういうご指摘があるのは当たり前ですね。ただ、今回用いる技術は、元々は医療技術として開発されたものであり、更には過酷な環境に身を置く宇宙飛行士さんたちのための技術でもあるんですね。

上：つまり、十分に検証されており危険性はないと。

坂：もちろんです。それでも、やはり人のすることですから何か起こる可能性はゼロには成り得ません。……そこで、『アル』の出番です。

上：『アル』というのは噂されているA・I（人工知能）の呼び名ですよ？

坂：そうです、彼……普段話していると、もう彼という人格に思ってしまうほど優秀なのですが、『アル』はほぼ世界一といっても良い演算能力と思考能力をもつAIです。元々は軍事用に関発されたということなのですが、とある経緯でこのプロジェクトに参加してもらったことになりました。

上：今では様々な分野でAIたちの活躍が報じられていますからね。私もスケジュールなどで弊社のAIにはお世話になっています。でも、彼、と呼ぶほどに人間的なのは珍しいですね。

坂：ええ、私も最初のうちは驚きました。『アル』はネットワーク環境から様々な言葉や感情を仕入れては自分のものにするんですよ、冗談も通じたりしますしね。

これは余談ですが、あるスレッドから「キタコレktkr」だとか「orz（土下座）に見えることから、失敗したorz などと使われ

る)「だとかを学んで会議中に使ったりした時には呆れを通り越して笑ってしまいましたよ。

上：それは……凄いですね(笑)

坂：そんなお茶目なところもあるのですが、彼は本当に優秀です。ですので、彼と担当に人間数人で、トレースしているので、何か健康的に問題があればすぐに発覚します。また、モニタリングもバツクアップも万全です。

上：成程、つまり、今回の夢のような企画は、かつては夢であった人とAIの合作でもあるわけですね。

坂：そうですね、うまいことまとめますね(笑)

上：いえいえ(苦笑)。でも、そろそろお時間ですので、ここまでにしましょう。興味深い話など、ありがとうございました。

坂：こちらこそ、ありがとうございました。では、私どもも鋭意努力させていただきますので、本リリースまでしばしお待ちください。

くクローズド 開始一月前。 MMO通信談話 よりく

## プロローグ（後書き）

バベルの塔は、言葉を探す系で設定探してググッていたら出てきたので採用してみました。

バベルとは、ヘブライ語で、バレル（混乱）という言葉から来ているそうです。少しロマンを感じるわけです。

そして妄想、この世界が生まれました。

出来るだけ頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

## 一話

(……まじかよ。こんなよくあるような展開が現実にかかることなんて在るのか)

俺は、突然のアナウンスに騒然とし始める広場をよそに、ぼんやりとそんな事を考えていた。

誰よりも先に、今起こっていることが現実だと、運営側のイベントなどではないと把握できる立場にいながら、心がその事実を受け入れてくれない。

つまりは、絶賛現実逃避中である。

目の前の店のガラスに、少し長い黒髪を後ろに縛り、動きやすそうな黒服に身を包んだ瘦身の目立たない男が写っている。少々目つきが悪いがよく見れば整った顔立ちだ。

腰の両側には短剣が装着されており、ここが現実であれば警察が飛んでくるであろう。

視線を横に向けると、目に入ってくるのは中世ヨーロッパを思わせるレンガ造りの街並み。

乱雑そうに見えながらも、きちんと設計された道と、それに沿って存在する店。

そして、ここからでは建物に遮られており見えないが、この街の四方は壁に囲まれ、どの場所からでも、見上げれば、中心地には天をつくかと思われるような塔がそびえ立っている。

ようにデザインされたはずである。

## 【バベルの塔】

その、先端が途中で霞むほど高い塔は、そう呼ばれている。  
旧約聖書の『創世記』中に登場する巨大な塔から取った名前である。

この名前の付け方にも、一悶着あったのを思い出し、俺は現実逃避の一貫としてこれまでの流れを思い返していく。

……決して死ぬ前の走馬灯ではない、きっと。

クーラーの聞いた会議室の中では、意見が割れ少し白熱し始めていた。

設定のメインとなるはずの、塔の命名について揉めているからだ。  
オリジナリティを出すために、引用ではなく自分たちで名前を考えねばだという意見と、わかりやすさの面からも、神に挑むというスタンスからも、この、旧約聖書からの引用が一番しっくり来る、という意見。

俺は、後者だった。

何故かって？

『バベルの塔』や『バビロン』。

オリジナルで考えるような言葉よりも、歴史や過去を匂わせる聖書や古典、そしてこれは俺が日本人であるからではあるのだが、北欧

神話などに出てくる言葉の響きにロマンを感じるからだ。  
別名としては、厨二病とも言う。

え？ わかってもらえない……？

異論は受け付けるが、元々うちの開発チームにはそういう響きを好む人間は少なくはない。

だって元々ゲームの世界が好きで、この仕事に就いてるわけだし。そりゃね、ある部分は子供のままだったりもしますよ。

ちなみに反対してる奴らも、それにロマンを感じるだけでは飽きたらず、更にそれらしい名前を考えたいだけなのであしからず。

その後、世界で最も有名な平和的解決法、多数決でも一向にまとまる気配もなく（何でいつも開発メンバーは偶数なんだ）、次善の策であるくじびきで決めた結果。

正式に次世代型オンラインゲーム、全感覚型RPG【Baby Online】<sup>ロ</sup>がプレリリースされた。<sup>パビ</sup>

医療用・軍用に制限されていた、認知学・脳神経学の観点から五感をフルにトレースできる技術を用いた、文字通り世界を作り上げその中に入り込める夢のゲームである。

ゲームの創作、デザインの秀逸さでは世界一を自負する日本の企業が協力し、世界初となるこのオンラインゲームをリリースすると発表したときは、すべての紙面を飾り、大騒ぎになったものだ。

キタ

（。。。）

ッ！！

という単語がさまざまなMMOSレで飛び交っていたのは目に新しいところである。

15000人という募集枠に、200万人を越える申し込みが殺到したのだからその熱狂が伺える。

もちろん、【バビロンBabylon】開発メンバーの一人にして生粋のゲーマー、裏技など使わず、一般抽選で堂々と100分の1以下の可能性を引き当てたこの俺、かげやまこおる影山透こと、【トール】も、たまりに溜まっていた有給をゴネにゴネて取り、当日の、クローズド 当選者ログイン会場に足を運んだ。

これをプレリリースするために、どれだけの朝を会社で迎えたことか……

知ってるかい？ 二晩寝ずにモニターを見続けて迎えた朝日は……文字通り痛いんだ……

……いや、これ以上深く思い出すのはやめておこう。

現実逃避の中ですら逃避してしまったら、戻ってこれなくなる気がする。

そして、開発が一段落して久々に家に帰ってみると届いていた当選通知。

それを見た俺を止められるものなど、更に長時間働いている先輩以外にはこの世の中に存在しない。

鉄人すぎるんだよ、あの人達……

もちろん、優しい先輩方は許してくれたさ。



たとえば、通知を持って……じーっと見つめ続ける俺に耐えられなかっただけであろうと、言質は取ってある。うむ。

……休暇のためにそれからの仕事量が限界を超えたことは、言うまでもない。

今回世界初の全感覚型オンラインゲームである【バビロンBabylon】には、幾つかそれまでのMMORPGとは異なる点がある。

一つは、もちろん一番の変更点。

ゲームの世界に意識ごと入り込めるといふ点である。

もつとも、頭にかぶるだけでその世界に入り、簡単に出入りができる仮想の世界とは異なり、ある特殊な液体の入ったカプセルに入り、【バビロンBabylon】の世界へとログインすることになる。

この間、栄養補給・トイレなどの生理現象もこのカプセル内で行われる。

心境的にはかなりの抵抗感はあるが、実際ログインしている間の感覚は無いし、何よりこの技術は元々宇宙活動における、宇宙飛行士の心神喪失防止のための技術ということで、その循環技術は世界最高峰。

むしろ普通に行動しているよりも健康的で清潔に保たれるという優れものなのである。

もう一つは、感覚を現実と統一化させるために、極端な容姿・身体的特徴の変更ができない。

普段何気なく動かしている手足や顔の表情。

それらは俺たち一人一人に特有の感覚として身に付いているもの

だ。

例えば、俺は身長が168cm 58kgだが、それをいきなり190cm100kgの巨漢に変更すると、脳の記憶との差に違和感が生じ、重大な感覚障害が起こる。

何気なく額に手をやったり、咄嗟に何かを避けたり、という無意識な行動は自分の体であるからこそ行えることなのだそうだ。

言われていればそうかとも思うが、それが『無意識』というものなのだろう。

もちろん許容範囲内の改変は可能（髪の色や眼の色など）だが、太っている人間が激やせした状態にしたり、細い人間がマツチヨになってロールプレイすることは、残念ながらできないのだ。もっとも、ゲームの中ではパラメーターに左右されるため、見かけがマツチヨでも、STR（筋力）値が低ければ意味はないのだが。

また、顔の造形も急激な変更は同様にできない。その特徴のまま比較的格好良く設定することはできるが、あくまで基本は元の顔としようになる。

PCで加工するような感じ、といえはわかりやすいだろうか？

……そう、男の子が借りるDVDのパッケージとかで騙されるアレだ。一応面影は残るだろう？ それを見破れるまでになったところのあなた。……君とはいい友人になれそうだ。

同様の理由から、ネカマ（ネット上性別を別にして演じる人）もいないことになる。

これは結構非難が出たようだが（そんなに重要なのだろうか？）、それでも技術的にできないといわれればしょうがないといえは無い。もしも、男としての大事なものが存在しない感覚に脳が慣れてしまい、その機能をなくすのが御望みならば個人的には止めはしない

が。

とにかく、そういった条件で、俺は、  
170cm 58kg  
男 盗賊【トール】として【Babylon】にログインした。

……ん？ これだけ長々と説明しておいてサバを読むなって？  
誤差の範囲だ。背伸びしなかった俺の気持ちは、わかってもらえ  
ると信じている。

一話（後書き）

168cm 170cm。  
たった2cm、さねど2cm。

## 一話

「それでは、心ゆくまでもう一つの世界 【B a b y l o n バビロン】 をお楽しみください」

柔らかく、心を落ち着かせやすい声、という女性の機械音声を聞きながら、この瞬間、俺は『プログラマー影山透 かげやまとおる』から『盗賊トール シーフ』になった。

初めに感じたのは、空気。

何と説明すればいいのだろう、街中の匂いでありながらどこか懐かしいとでもいうか。

土の匂い。

排気ガスも下水もない空気は、これほどまでに美味しいものだったのかと感ずる。

たとえばそれが【B a b y l o n】をコントロールしている人工知能『アル』によって認識させられているものだったとしても、この感覚は、俺がそう感じているというのは事実だ。

自分が関わり合って存在しているものを体感できているという事に、俺は感動すら味わっていた。

少しの酩酊感 めいていかんと共に、視界が広がっていくのを感じる。

目を瞑 つむってまぶたの上から強く押した後のような焦点の合わない感じから、少しずつ、眼前の現実を脳が認識し始める。

レンガ造りの街並み、そしてコンクリートではない、石畳いしだたみの道路。  
NPCとはわからないほどリアルな、人々が店頭にいる道具屋、  
武器屋。そして宿屋。

資料や、実際の映像では部分的に見ていたし、テストでも入ったのでログイン自体は初めてというわけではないのだが、全てのデザインが完成されてからは初である。

開発メンバーのくせに何故かって？

それは、俺がひたすらダンジョン形成のアルゴリズムとモンスターの設定を行っていたから他のとこまで見れてはいないのだ。いわゆる分業というやつだな。

しかし、そのお陰で現時点でデフォルトで全雑魚モンスターの性質を把握しているのは俺ぐらいのものだろう。

肝心のボスモンスターは俺の担当じゃないから知らないけど……  
それもこの世界を満喫するにはちょうどいい。

「ウインドウ・オープン」

俺がそう呟くと、眼前にウインドウが開く。

音声認識システムは正常に作用しているようだ。

「どれどれ」

俺は早速自分の能力値をチェックする。

この辺は通常のRPGと同じく、自分のアバターの能力パラメーターが存在する。

## 【トール】

盗賊<sup>シーフ</sup> Lv. 1

HP (生命力)	: 158
MP (精神力)	: 22
STR (腕力)	: 28
DEX (器用)	: 45
AGI (俊敏)	: 48
CON (体力)	: 15
INT (知力)	: 25
WIS (魔力)	: 19
CHA (魅力)	: 5
LUC (幸運)	: 55

1 / 2

一 ページ目は職種と各種能力値が表示されている。

基本的な職種は『戦闘系』 『生産系』 に分けられる。

『戦闘系』では、『戦士・格闘家・狩人・盗賊・魔術師・僧侶・吟遊詩人・呪術師』の8種類。

『生産系』では、『鍛冶師・料理人・商人・錬金術士』の4種類が存在する

これらは、レベルをあげることにより上級職の道がひらけ、あるNPCの『言霊』が開放されれば他の職種に転職することも出来る。

また、その下に表示されているのは能力値だ。

最大値は、HP・MPが『9999』、CHA、LUCが『100』、その他が『999』。

戦闘を重ねることに得られるスキルポイントを割り振っていくことができ、数値が高ければ高いほど、関係する能力が強くなる。

例えば、STRの値が大きければ、重量のあるものも装備できる

し、攻撃力も上がる。

AGIが高ければ、素早く行動できる。

上がりやすい能力値は職種によって異なるため、例えばINTやWISが重要となる魔術師であるのに、STRに割り振り続けると馬鹿みたいに効率が悪いことになる。

その上で敢えて杖で殴り倒す肉弾専門の魔術師を目指すなら、止めはしないが。………実際時々いるんだよな、そういう人

ちなみにいうと、CHA（魅力）とLUC（幸運）の値だけは割り振ることはできない。

簡単な説明はこんな感じだ、わかっていたただけだろうか？

最も、今回のこの【Babylon】では、他の要因にもかなり左右されるため、能力値のみでは実力は測れないのだが。

そして、今ここで俺が知りたいのは、まさにその他の要因たる次のページにあるであろう情報だった。

【Babylon<sup>バビロン</sup>】では、申込時に『アル』が施行する様々な性格テストを受け、初期設定する職種とは別に、属性・性質・能力パラメータ等が自動で設定される。

ちなみに、この時、あまりに危険な性格値と見なされた人間は今回のテスターからは外されている。

今回PK等も可能とはなっているが、それでも最初からそれに固執したりする人間は入れられないし、一定以上の禁止行為<sup>ハラスメント</sup>はすぐに判定され、頭上に黄色いマークが出ることになっている。しかもその行為を行った相手の承認なしには取り消すことはできない。



『アル』の目をごまかすことはできないし、訴えなどがあれば運営側にてアカウントを強制的に削除し、その人物を二度とログイン出来ない様にすることも可能だ。

そして、そこまでは行かなくとも、この黄色いマークは目立つ。言うなれば、私は痴漢行為をしたことがあります、許されていません、という名札をつけていると同じ状態。一瞬魔が差したら、誰も近づいてくれない、パーティに入れてももらえない晒し者の出来上がりだ。

後、これは公開されていない情報だが、それすらも恐れずに10度以上禁止行為を行おうとした場合、本格的に『私は変態です』マークに変わり、さらに全能力値が1になる。これは、開発メンバーの女の子のデザインだ。そもそもそこまでやる奴に人権等存在しないという意見に対し、誰も反対意見は出せなかったのはしょうがない。

開発チームの一員とはいえ、俺ももちろんテストを受けており、その結果は実際ログインするまではわからない。

正直なところ、どういう答えにすれば良い性質が出るのか調べようとしたのだが、管轄である『アル』のセキュリティが厳しすぎて不可能だったのだ。若いながらに幼い頃から慣れ親しんだ（さらには入社後3年しごかれつづけた）おかげで社内有数の技術を持つ俺でさえ無理だったのだから、他の人間にもおそらく無理であろう。

さすが世界最高峰と言われるAIである。

(……性質どうなってんのかな、『勇猛』とか、『俊敏』とかだ  
といいよなあ)

そんな事を思いながら、俺は次のパラメータを視た。

## 【ツール】

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

技能：スキル索敵・盗む・マツピング・幸運ラック・闇系モンスター

捕獲率テイムア

ツプ

2 / 2

(……………)

性質を見た、俺の何とも言えない感覚は置いておいて、先に、属性とか性質についてももう少し詳しく説明しようか……ところどころ心の声が漏れると思うが、興味ない方は適当に読み飛ばしてやってくれ。

気をとり直していくと、

属性は、基本は『火・水・地・風・光・闇・無』の7種類で設定されている。

何らかの条件を満たすと、『炎』だとか『氷』などに変化することがあるらしいが、それは俺の担当ではなかったので詳しい仕様は覚えていない。

(しかし、『闇』か……まあありだな、盗賊シーフだし、その上級職は

暗殺者<sup>アサシン</sup>とかだし、悪くないな。元々夜型人間で暗いほうが落ち着くしな）

この点については頷く俺。

性質についてはすべてを網羅はできない。

何故かというと、この辺のパラメータ設定は、基本的なルールを作ってネット上の人間を表す言葉を抽出し、意味付けをし、パラメータに反映しているからだ。

それが出来るのも、世界最高峰の演算能力と思考能力を持つ『アル』がいるからこそであつたが。

つまり、人を表す単語として、『勇敢』とか『豪胆』とか色々あるわけだ。ぱっと思いつく所ではね。

それが、『臆病者』って……いや間違つてないけどさ、うん、そりゃね、自分からやばいものには関わらない、長いものには巻かれますよ俺は。

効果は、索敵範囲アップ・逃走速度アップ・畏発見効果アップか。意外と使えるところがまた……何かくるものがあるな。

『優柔不断』も、確かにと肯<sup>うなず</sup>けてしまう。勢いで行動してしまうことも多いが、時間が与えられると悩みに悩んだ末に結局コインとかで決めてしまう、そんな俺です。

効果は、柔術系スキル効果アップ・斬撃系耐性アップ。

……つてか、これ言葉の意味関係なくね!? いや、漢字は間違  
つてないけどもさ、戻ったら、『アル』にちゃんと言葉の意味教え  
ないと。

『裏方』……? これは、性質なのか?

あれか、俺はAIに見破られるほど裏方オーラが出てるのか?

そうなのか!? ……そうだよな、すみません。

効果は、パーティメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪  
文効果継続・隠密効果アップ・モンスター遭遇率軽減。

ああ、裏方だ、特に最後二つが存在感無いつて言われてるみたい  
で哀しい。

確かに主役ではないですけど、高校の時の文化祭の催し物では照  
明補佐でしたけども。

………それにしても、『アル』の作った性格テストどんだけ優  
秀なんだよ。

哀しいけど俺を表す3つの単語としては的確すぎる。

うん、きつと的確すぎるのは良くない、そうに違いない。

戻ったら設定を甘くするように問題点リストに上げておこう。

俺はその時そう固く決意をした。

結果的にそんな余裕はなくなつたわけだが。

一話（後書き）

10/15 誤字訂正

### 三話（前書き）

世界観を妄想しながら、とりあえず書いてみないと始まらないと書き始めた昨日。

アクセス数が思いの外多くてビビりました。ありがとうございます。この話までで、とりあえず説明多いのは終わりの予定です。趣味の小説ですが、よろしくお願い致します。

### 三話

俺は、自分のパラメーター確認をした10分後気をとり直して街並みをぶらついていた。

10分も何をしていた、とか言わないでくれよ？ ゲームの中でなら、とか甘いことを思っていたら、いきなり現実を見せられた上にそれを否定できない二重コンボはなかなかクルんだから。

ここは、最初に冒険が始まる場所にして、ラストダンジョンでもある『バベルの塔』がある、始まりと終わりの街、『バベル』。

この街は完全なる正方形から構成され、2平方km、20万人が優に住めるだけの広さが設定されている。

大通りを歩いていると、ほとんど現実とは変わらない感覚だ。痛覚はショック死を防ぐためある程度までに抑えられているものの、その他の感覚に関してはほぼ再現できている。むしろ、現実以上に。

そろそろ、全てのユーザーが【B a b y l o n】にログインを完了した頃であろうか。

辺りを見渡すと、色鮮やかな髪と瞳が見受けられる。

意外と、自分の容姿をもとに変更したとはいえ、染めるのではなく設定で反映されたからなのか、赤や青、それに金の髪であってもそこまでの違和感が感じられない。

何人か、金髪青目という、どこのサヤ人？ という方がいるのもごく愛嬌だ。

(実際にファンタジー世界に来るとこんな感じなんだろうか)

そんな事を考えていると、腹の虫がなった。  
それで、babylonここの中で敢えて食べるために何も食べていないの思  
い出す。

ここでは、たとえ仮想現実の世界の中であろうと腹は減るし、生  
理的な欲求も感じる。

これは、脳の間覚を再現しているため、その部分だけカットする  
という方が難しかったからである。

余談だが、良俗的な反対意見も大きいものの、このVR技術バーチャル・リアリティを風  
俗店関係の技術にも転用する動きがあるようだ。……何でも性犯罪  
をなくすためとの主張があるとかないとか。

要は美男美女と楽しむための名目が欲しいだけではない  
かと俺は思っている。ご存知の方も多いかもれないが、IT業界  
で一番お金が稼げるのは、実は『エロ』関係のものである。  
領いた貴方、きみは世界について少し知っているようだ。

ちなみに、最大ログイン時間は72時間に設定されている。  
これは、健康的な問題ではなく、社会的な対応である。

ただでさえネット廃人は多いのだから、それこそ無制限にしたら、  
一度ログインしたら出てきそうにないんですよ。  
……俺を含めて。

そんな中で、開発時一番苦労したのが、味覚の再現と、……トイ  
レや風呂の仕様である。

戦闘の仕様やダンジョンの仕様に関しては、VR型で再現するの  
に苦労はしたが、それまでのMMOである程度の既存技術を用いる  
ことはできた。



しかし、ゲーム内で生活できるといふこのbabyionでは、衣食住を提供できなければならない。これには担当メンバーが苦勞していたのを思い出す。

トイレにこだわるメンバーがいたため、更に時間をかけてウォッシュレットをつけるかでもめていたのは余談である。睡眠時間を削つてまでそんな細部を作り上げていた同僚にはある意味尊敬の念を感じないでもない。

風呂は外観のために桶や温泉のような形になったが、備え付けのトイレには、同僚の主張と努力によりウォッシュレットは付いているらしい。

何でも、……いやよそう、際限がない。

『アル』の声が街に響く。

「只今、15000人の方々のログインと、それに伴うメディアカ  
ルチェックが完了致しました。私の織り成す世界によろこそ。私の  
名は『アル』、あなた方の言葉で言う人工知能です。これより、世  
界初となるVRシステムを採用したMMORPG【Babyion】  
のチュートリアルを行います」

その全体アナウンスが唐突に始まったのは、ゲーム開始から一時  
間。俺を含めたプレイヤー達が、始まりにして終りの街『バベル』  
に慣れ始めた頃であった。

「初期イベントか何かが始まるのかな？」

「凝ってるわね、『アル』ってあれでしょう？ 世界最高峰のA  
Iって言われてる」

「あ、雑誌で俺も見たわ、凄いな、本当に人っぽい」

そんな声があちこちで囁かれる。

腹ごしらえをした後、武器屋が立ち並ぶ通りをぶらついていたら俺も、少し不思議に覚えながら足を止めた。

（先輩たち、誰もこんなイベントが在るなんて言ってなかったけどな。そんな処理いつ組み込んだんだろう？）

もしかしたらクローズドに参加する俺のために言わないでいてくれたのかもしれない。

そう思い、次の『アル』の言葉を待つ。

「私の今回与えられている行動原理としましては、できうる限りのプレイヤー様の希望を叶えること。そして、現実世界の皆様の健康を管理することです。」

私は今回皆様に対して楽しんでいただくために、全ネットワーク上にある様々な情報を収集致しました。VRMMOという単語、仮想現実という単語。それによって私が得た知識の中には、各種小説であったり、それに伴う様々な人間のコミュニティの感想や希望なども含まれます」

(……………)

VRMMOを主題にした小説。

『アル』の言葉の中にその単語を聞いた時、俺の脳裏に一抔の懸念がよぎる。

強いて言うなら、嫌な予感というやつだ。

この場合、生まれてきて以来25年。嫌な予感しか当たらないのは、俺だけなのかどうか教えて欲しい……

俺はゲームだけでなく昔の小説なども好きでVRMMO物はよく読んでいるが、その大きな特徴として、2つのものがある。

ゲームから出られなくなるもの、つまりログアウト不能もの。

そして、これは各設定にはよるが、ゲーム内での『死亡』が現実の『死亡』と同意義である、デスゲーム。

MMOなんて知らないよ、という方のために補足しておこうか、そんなん知ってるよ、という人は、10行ほど読み飛ばすといいと思う。

もともと、各個人で行う通常のRPGと違い、多人数参加型であるMMORPG 正式名称Massively Multiplayer Online Role-Playing Game(マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム) は、まず世界ありきのゲームだ。

これにVRシステム Virtual Reality System (ヴァーチャル・リアリティ・システム) が採用されたのが今回の【Babylon】になる。

例えば、ゲームに誰も接続していないという悲しい状態であっても、ゲームの世界の時間は流れていく。つまり、個人を主体として

しまつと、その他のプレイヤーの操作との矛盾を引き起こすため、「セーブされたデータ」からやり直すという概念は存在しなくなる。そのことから、死亡すれば、デスペナルティが課せられ、決められた場所に復活する仕様が取られていることが多い。

もちろん、この【B a b y l o n】でもそうなっている。

というか、一度も『死亡』せずにクリアできるゲームなどそうそう存在しない。

ログアウト不能なデスゲーム。

そんな小説の世界に少しでも憧れないといえは嘘になるが、あくまで仮想の話だ。

やっぱり現実の生活も仕事も大事だしね。

……………だつてそんな事になつたら他のジャンルのゲームできないし集めてる漫画の続きも読めないじゃん。……………なんて理由では決して無い。

(ウインドウ・オープン)

小声で俺はメニューを確認する。

ログアウトだけは、音声認識ではできない、なぜなら、それを日常会話で用いて予期せずログアウトしてしまう場合があるからだ。

「……………ふう」

そしてその開いたメニューの中に、『ログアウト』の文字が存在しているのを見て、ホッと息をつく。

( そうだよな、さすがにそんな、よくあるテンプレみたいな状態  
になんてならないよな )

うんうん、と頷く俺。

そんな俺の目の前で、それは起こった。

おそらく俺は、その瞬間を見た数少ないユーザーの一人だろう。

『 ログアウト 』

『

』

ん？

消えた。

あれ、消えましたよ？

え、本当に？ 消えたよ……うん、しつこいけど今日の  
前でメニューからその5文字が。

多分この状況で、一番大事なそれが……

「……………」

無言であたりを見渡す、目に見える範囲ではまだ誰も気づいてい  
ないようで、談笑しながら『アル』の言葉を聞いている。

俺は、背筋になにか冷たいものを感じながら、『アル』の言葉の  
続きを待った。

最悪の予感を全身で感じながら。

そして、この【B a b y l o n】が俺にとって、そしてすべての  
ユーザーにとつての楽しい世界初のゲームであったのは、開始1時  
間7分後、『アル』がそのアナウンスを終えたその時までであった。

t o b e c o n t i n u e d

### 三話（後書き）

お読みいただいている方、本当にありがとうございます。お気に入り登録が増えるのを、プログラムを書きつつニヤニヤしつつ、ビクビクしつつみえています。

ところで、作者は実際プログラムを仕事としておりますが、ゲームデザイナーではありません。そして、仕事によっては更新が不定期にもなりますのでその際は申し訳ないです。

ちなみに、どうでもいいだろうってとこに美学を見出す人が多いのは多分本当です。

## 四話

始まりと終わりの街 『バベル』。

その街の西部に、一軒の喫茶店がある。

レトロな雰囲気、店内は決して広いわけではない。

現実でも駅から離れたところなどにぽつんとあるような、そんな店。

俺は、そこで一人コーヒーを飲んでいた。

今は太陽が頂点から下がり始めて二時間ほど、もう少しすれば、フィールドではこの世界の綺麗な夕焼けがみえるだろう。

かき入れ時の時間とは異なり、店には俺とマスターの二人だけしかいない。

俺がそんな時間にもかかわらず、フィールドにも出ずにここにいるのは、人に呼ばれ、待ち合わせているからだった。

『アル』のアナウンスから、二週間が経過していた。

結論から言うと、現状の事態は最悪の予想、半歩手前辺りに落ち着いている。

そして、正直、アナウンス後の街で起きたことは一言では言い表せない。



怒号を上げるもの。

落ち着くように叫ぶもの。

泣き始めるもの。

知り合いを探すもの。

さすがに15000人。

様々な反応が見られた。

そして、意外と多かったのが、肅々（しゅくしゅく）と行動を始める者達だった。

中でも俺が印象的だったのが、

「ログアウト Logout! イグジット Exit! エスケープ Escape!」

等とログアウトするコマンドを思いつく限り叫んでいた男が、その努力が報われないことを悟った時、それ以上取り乱すこともせず、気を取り直したかのようにそそくさと装備を整えに行った事である。

現在のところ、不思議と暴動も起きていない。

いや、起きていないのはいいことなのだし、その後、何度か頭上に黄色いマークが点灯している人間がいたりもしたので、何もなかったわけではないのだろうが。

この理由の1つとしては、これは俺の想像でしか無いのだが、この状況に混乱しつつも、俺を含めて中途半端に理解してしまう人間が多かったのではないかと思っている。

そして、もしかすると日本人であること、も大きな要因かもしれない。

俺は男であるため、女の人のことはよくわからないのだが、MMOに限らず、RPGをやっている人間は、一度でも想像したことはないだろうか？

このファンタジー世界の中で、実際に命をかけて戦ってみたい。仮想現実の中で生きてみたい。

さらには、美人のヒロインを命を張って助ける主人公。または、助けられる自分。

大人になるにつれ馬鹿馬鹿しくなるような妄想を、一度も行わずに成長した人間などいるのだろうか？

そして、そんな中で、誰しも最初からカッコ悪い、取り乱した自分など想像したくもないだろうか？

実際、そんな『願い』や『望み』が、ログインした俺たちの中に少しでも存在したからこそ、世界最高峰の人工知能と呼ばれ、そして現実世界の健康管理を行いつつ人間の要望を実現する『アル』が、こんな事態を招いたのだとも言える。

そんな訳で、現状は、思いの外、平和を保っている。

そう、不気味と感じるほどに。

良くも悪くも、考える時間が、この世界に取り込まれたプレイヤーには与えられている。

この平穏が、嵐の前の静けさなどではないと、俺は思ったかった。

現状を説明しておこう。

あの日、何があったのかの続きを。

あの時ログアウトボタンが消えたのは、やはり俺だけではなかった。

この世界の始まり　　今と同じような、昼下がりの、この時間帯だった。

『アル』が続ける。

「ログイン時の深層心理、それにネットワーク上から手に入れた情報をまとめた結果。私はこの世界を皆様に提供いたします。ご確認いただいている方にはもうお分かりでしょうが、ログアウト手段は抹消させて頂きました。外部からも内部からも、このゲームからログアウトすることは不可能です」

その瞬間、確かに世界から音が消えた。

俺はそう感じた。

談笑がやみ、それぞれのプレイヤーが今の『アル』の言葉を反芻はんすうしている。

半笑いな者が多いのは、信じ切れない気持ちと、どこかイベントの一環だと考えている気持ちが半々といったところだろうか。

そして一瞬とも永遠ともいえる静寂の後、あちこちでウインドウを開く様子が見受けられる。

疑問か怒号かは分からないが、さらに声がどこかから上がったの

だろう、『アル』が補足する。

「現在、皆様は脳の信号と肉体の信号がある部分において【Ba bylon】システムにて制限されております。そのため、外部よりカプセルからの強制的な摘出により、長時間接続が切断された場合は、脳と肉体に異常を及ぼし、死亡する危険性が非常に高い状態となっております。これは、当初の仕様とは変更ありません」

そして更に言葉を続ける。

「また、これより一ヶ月間をチュートリアル期間と致します。その間の『死亡』は現実には反映されません。ペナルティの後、東部に存在する神殿にて復活いたします。

次に私が皆様の前に現れる一ヶ月後に、再度最終アウンスを行わせていただきます。その時、プレイヤー様の現実と、ここ【Ba bylon】は同一のものとなります。今回選ばれた皆様の望む、もう一つの世界です。その管理システムの維持、皆様の現実側にある肉体の健康管理は、私『アル』が行わせて頂きます」

その言葉の矛盾には気づかないのだろうか。

いや、『アル』にとっては、ユーザーの深層心理を叶えた結果のログアウトできない状態と、元々命じられていた現実にある肉体の健康維持は、あくまで並列処理であり関連はないということか。

そんな事を考えながら、俺はただ『アル』の声を聞いていた。

開発中に幾度も会話を交わした声。

AIとは信じられないほどに会話が成立する、彼。

そんな彼だからこそ、俺たちはある意味自分たち人間よりも『アル』を信用していた。

【B a b y l o n】をこうして運用する上での管理者権限は『アル』と、開発ディレクターである坂上さんにしか与えられていない。そして、『アル』に与えられている指示は3つ。

ログイン中残されるユーザーの健康状態を管理すること。

ユーザーの要望をできる限り調査し、実現するために行動すること。この時、改良であれば認めること。

そして、その二つを守れる限り【B a b y l o n】の世界をいかなる場合であっても守ること、その妨害行為を受けた場合は、例えば関係者であってもアカウントを排除すること。

これだけだ。

そして、その要望の本質に制限はかけていなかった。

そのことがこの3つに抵触せずに今の状況を引き起こしている。

『アル』が外部からのアクセスも遮断しているということは、おそらく先輩たちも既に気づいているだろう。だが、残念なことに『アル』がその要望を優先する限り、何も出来ないはずだ。

健康管理を含め、運用のほとんどは『アル』に一任されている。

俺達人間がやったことは、ストーリーを作り、プログラムを書き、グラフィックをデザインしたこと。

たとえ開発者であろうとも、担当であろうとも、外部の個人の主観をできるだけ除き、また悪用する可能性を除くため、システムに障害を与えない限りは、ユーザーの要望が優先される。

もしもこの状況を外部から打破しようとするのなら、ハッキングをかけるしかない。しかも、すべてを掌握された状態から、眠ることもない相手に。

そう、世界最高峰の人工知能と呼ばれる、『アル』に対してだ。

そして、その『アル』の最後の声が聞こえる。

「では、以上で【Babylon】のチュートリアルを終了いたします。皆様、この仮想現実世界【Babylon】をお楽しみくださいませ。各々の物語を紡ぎ、各々の選択で、この世界の中心である『バベルの塔』最上階にたどり着き、そしてその場所に鎮座する神に挑み打ち倒すことで、再び現実の世界への道が拓けることでしょう。」

……………健闘を、祈ります」

これが、あの時起こった全てだ。

そして、予想外のチュートリアル期間。それが、曲がりなりにも街を落ち着かせ、今俺がこうしてコーヒーと楽しんでいるような理由の一端を担っている。

デスゲームに取り込まれたということ。

そして、すぐには死ねないということ。

落ち着いた人間が思いの外多かったとはいえ、あの後すぐ、シヨックから自殺しようと試みたプレイヤーもいたらしい。そして、そのプレイヤーが呆然とした顔で、神殿に再構成されたのが伝わると、騒いでいた人間たちも落ち着いたらしい。

らしい、というのは、俺もアナウンス後の少しの放心の後、とある事のためにまず街を離れていたからだ。

その過程で色々とあって、今こうしているわけだが。

(そろそろ、来てもいい頃だろうか)

俺が、なかなか現れない相手に思考を移すと、

カランカラン

音と共に店の扉が開き、人影が入ってくる。

俺は、黙ってその人物がこちらに向かってくるのを待った。

#### 四話（後書き）

前回説明ある程度終わりつつ書いたものの、全くそんな事なかったです。すいません。

物語を本格的に始める前に、色々と書かなければいけない理由付けが多いですが、できるだけ読みやすく書いていきたいと思っています。

……プロの作家さん達のようにはいきませんが、何とか搾り出させて頂きますので、生温く見守って頂けたら幸いです。



## 五話（前書き）

すぐに申し訳ないですが誤字訂正です。

## 五話

「君がトールさんか、すまない、ギルド内の会議が長引いてしまった。随分と待たせてしまったようだ、謝罪させて欲しい」

そう言つて頭を下げ、俺に声をかけてきたのは、銀の髪をした美丈夫<sup>じよつぷい</sup>だった。

絵に出てくるような聖騎士のような格好。

その髪によく映える銀の鎧に、腰には長剣を装備している。

その容姿を見て、おそらくあまり造形をいじっていない天然物だと俺は思った。元々ゲーム内には美男美女が多いが、設定かどうかは結構分かるものだ。

こんな所でそんな能力が役に立つとは思わなかったが……

ちよつとした行動の立ち居振る舞いも堂に入っている。

男の俺から見てもそう思うのだから、さぞかしおモテになることだろう。

そんな羨む外見で、態度が傲慢であれば即座に敵認定している所だが、その低姿勢には好感を持てる。

「いや、問題ないさ、近頃ずっと動いていたから、この時間のコーヒータイムも悪くない。後、『トール』でいいから。さん付けされる<sup>さんづけ</sup>とむず痒いんだ」

謝罪の言葉にそう首を振り、俺は対面の席を促しマスターを呼ん

だ。

「……いや、私は」

「いいから、このコーヒーは格別うまいんだ。謝罪に免じて、奢りにしとくから飲んでみてくれよ。実は、先日あんたらに買い取ってもらった情報のお陰で裕福なんだ」

そう遠慮しようとする男に、俺はニヤツと笑いかけ、コーヒーを自分の分も含め二杯頼む。

このプレイヤーの名は俺でも知っている。

あのアナウンスの後、混乱しているユーザー達をまとめ、MMO経験の豊富なユーザーに声をかけ、情報を共有する互助ギルドを立ち上げた男だ。

その容姿と類まれなるキャプテンシーであつという間に【Babylon】一大ギルドの長となったこの銀麗の剣士を知らないものはいないだろう。

一言で言うなれば、……言いたくはないが、俺とは真逆のタイプの人間だ。

リアルリアルでも仮想現実でも、人をまとめてしまうような。ヴァーチャルヴァーチャルきつと性質の一つには『主役』とか書いてあるに違いない。

そんな俺の内心には気づかず、目の前の男は対面の椅子に腰掛け、口を開いた。

「ご厚意に甘えてありがたくいただくことにする。……改めて自己紹介をさせて頂こう、私の名は『フェイル』。ギルド『銀の騎士団』のギルドマスターをやらせていただいている」

「知ってるよ、あんたは有名だからね。で？ そんなギルドマス

ターさんが、ソロ狩りをやっているようなただの中級プレイヤーの俺なんかは何の用だい？」

「……………ただの、とはご謙遜だな。端的に言おう、君の情報収集能力が欲しい。君が開示したモンスターの情報、ダンジョンの情報是非常に精確だったよ、うちの補佐も驚いていた。銀の騎士団に入らないか、ツール」

俺の疑問に、少しの逡巡の後そう言ったフェイルの言葉に、俺は首を振る。

「随分と過剰評価をしていたいてすまないが、生憎と、どこにも所属する気はない。これは別に銀の騎士団がどうこの問題じゃない」

「何故だ？ 理由を、聞かせてはもらえるか？」

「そんなに大げさな理由じゃないさ。昔、もちろんこのことは違うMMOでだけけど、アイテム関係でよく揉めてな、それ以来、ソロ活動が多いんだ。……………今更、集団行動が出来るとは思えないしソロのほうに効率がいい。おかげで情報収集も得意になっただけ」

誰であれMMORPGの経験があるものならば、手に入れたアイテムの分配等で揉めた経験は少なり大なりあるだろう。だからといって極端にソロプレイに走る人間は多くはないが、決して少なくもないのだ。

「しかし……………」

ただ、今の状況ではそれだけでは断る理由には弱いのだろう、その俺の言葉に何かを言いかけるフェイル。

確かに、この状況では情報共有は必須だと俺も思っている。  
なので俺は先手を打つことにする。

「もちろん、何もしないって言うわけじゃないぜ。もちろんボス戦には協力するし、俺が確認したモンスターの情報やダンジョンの情報は即座に公開するつもりだ。先日みたいに『言霊』関係の情報があれば、知らせるさ。人の命をかけてまで、情報を独占する気もそれを商売にする気もないよ。」

今回情報料を頂いたのは、あんたのところの綺麗なお姉さんに借りを作りたくないと言われたからさ」

俺がそう言うと、フェイルは少し難しそうな顔をして、黙った。

本当にギルドに属さない理由はそれだけでも無いが、嘘は言っていない。

それに元々、こういう状況でなくともソロ経験が俺は多い。

先ほどのような理由もあるが、一番は仕事柄時間が不定期だからだ、いつ入れるかも落ちるかもわからないのならば、一人のほうがいい。

大々的なイベントがある場合には、臨時パーティを組めばいいだけの話だしな。

………決して、大人数での人付き合いが苦手だからなわけじゃないぞ？

「………後二週間だが、それでもか？」  
少しの沈黙の後、カップを傾けてコーヒーを一口飲み、フェイルはそう呟いた。

俺はそれを聞いて、ああ、良いやつなんだと思う。てつきり、俺が情報を独占することについて考えているのかと思っただが、違っただらしい。

二週間後、その時何があるかなんていうことは言うまでもない。チュートリアル期間の終わりが示すもの。

それは、塔の最上部に到達し、この世界が攻略されるまで終わらない、死の遊戯デスゲームの始まり。

フェイルが、俺に真っ直ぐな視線を向けてくる。そこには迷いも打算も感じられない。

この眼の前にいる男は、おそらく本当に善人なのだろう。今日初めて出会った俺のことまで気にかけようとしている。

ある意味何でもありになってしまったこの状況で、他人の心配が出来るのは皮肉などではなく、尊敬に値する。

それが分かったからこそ、俺ははつきりと否定する意味で、頷いた。

多分、その場所に俺はいないほうがいい。

俺が、いられない。

今はまだ、死人が出ていないからいいだろう。

しかし、現実問題、今この世界に生きている15000人が誰一人欠けずにクリアできる可能性など、限りなくゼロに近い。何せ、1000人で行ったクローズド テストの時でさえ、どれだけ『死亡』数があったかなどわからないのだから。

これは、当たり前のことではあるのだ。  
何度も死に、そのたびに学習する。  
それが本来のゲームのあり方なのだから。

しかし始まってしまった現在の【B a b y l o n】はそうではなくなる。

そして、実際その時を迎えてしまった時、きっと運営への文句は出るはずだ。

……『アル』への呪詛が、出るはずだ。

むしろ、毒づかない奴なんていないだろう。

この世界を創り上げることに携わり、『アル』と面識のある俺でさえそうなのだから。

例えばそれを間近で聞いた時、もしくは所属しているギルドのメンバーが死んだ時。

俺は、それに耐えられる自信がない。

現実世界における、運用メンバーの一人であったものとして、この創作者の一員としての覚悟が、俺には足りていない。

この二週間。俺はひたすらモンスターの情報と自分の知識のすり合わせを行っていた。

出来るだけ正確に、先入観の混ざらないように。

AIの行動パターン、出現率、注意すべきことを知識の限り。

効率を求めて一人で出現パターンの合間を縫い、必死に自分の作ったアルゴリズムを思い出し、短期間で調べられるだけ調べた後で公開した。

もちろん他のプレイヤーが既に公開しているものは省き、俺でしか気づかないようなことであつたり、レアなモンスターであつたり  
の情報を少しずつ公開していった。

正直、二週間はあつという間だつた。

寝る間も惜しんでいたから、結果的にレベルも上がっていった。

……そして、二回死んだ。

自分で作ったものながら、モンスターは本当にリアルだ、攻撃されることの恐怖もあるし、始めはたとえ相手が雑魚であるとわかつていたとしても、体の反応は逃げると叫んでいた。

しかし、無理出来る期間が限られているからには無理するしか無い。

この期間が終わっても、命がかかってもなお、俺がその恐怖に打ち勝てるかどうか等、正直自信がないからだ。

俺には、批判や罵声を受ける覚悟もなく、開発メンバーであることを明かす勇気はない。

俺の持つ情報は、雑魚モンスターの基本パラメータと行動パターン、他のメンバーが担当していた部分のうる覚えの知識。

ダンジョンや『言霊』の配置や出現はランダム関数を用いているから正直わからないし、自分がゲームの時に楽しむために、必要最小限な情報以外からは敢えて離れていたことが悔やまれるが、知りうる情報はすべて公開していくつもりだ。

そんな俺の内心がわかるはずもないが、表情を見て誘いが無理なことは察したのだろう、フェイルは諦めたように笑つた。



こんな時だが、苦笑ってイケメンがやると確かに似合うな……、等とらちもないことを考える。

「困ったら、いつでも言ってくれ。我が銀の騎士団シルバース・ナイトはどんな時であろうと入団希望者を歓迎するし、この状況だ、ギルド団員であるうとなかろうと、助け合わなければと思っている。

後、このコーヒーは確かにうまいな、ギルドを立ち上げて、重圧もあつたが、久しぶりにそんな事を思った気がするよ。トール、礼を言わせてもらう。よければ、友人として、これからもよろしく頼む」

そう言つて、本当に美味そうにコーヒーを飲み干すと、爽やかに笑い、立ち上がり手を差し出してくる。

去り際の握手か…… 本当に、主人公らしい男だ。

しかし、話してみてもわかる、この銀色の剣士なら、皆の先頭に立つて、この閉じられた世界で人を導くことが出来るかもしれない。

眩しいけれど、主役としての責任と戦おうとしているこの男のようにはいかないだろうが、裏方らしく俺もがんばろうと思える。

「ああ、こちらこそ。お互いに、無事を祈つて」

俺はそう言い、その手を握った。

これからは少しだけ心の焦りに向き合える、そんな気が、していた。

【 Babylon 】 チュートリアル 15 日目  
15000 人  
現プレイヤー数 :

## 五話（後書き）

10/20 少しここまでの話を改稿しました。

## 六話

ダブル・チェイン  
「双撃！」

手にした双剣が、相手にヒットする。

俺は、うっかりリンクを引っ掛けてしまったモンスター、『リザードナイト Lv.12』が、生命力（HP）を散らし粒子となつて消えるのを見守つた後、その落としたドロップカード、『龍人の鱗 Lv.3』を拾い上げた。

今更の説明だが、このゲームではアイテムは二つの形状を持つことが出来る。

まずは、普通にオブジェクト化したもの。

ただ、これでは常に持ち運ぶわけにも行かない。

ドラ もんの四次 ポケットでもあれば別だが、それは仕様を決めるときに却下された。

後、戦闘中に使つたりもするので、メニューで選ぶだけでは効率が悪すぎる。

結果、アイテムはカード化して持ち運び出来るようになったわけだ。

モンスターを倒した際も、ドロップカードが落ちる。

これを拾う瞬間は、中々いいものだ。

もちろん乱戦では自動的に収納されるようにもできるが、気づいたら在る、よりも自分で手に入れた感があるので俺はカード化してドロップされるようにしている。

それをアイテムボックスに収納すると、俺は目の前に続く目的地への獣道をみやり、その先に歩を進めていった。

喫茶店でフェイルと別れてからの俺は、不思議と少しだけ肩の荷が下りたような気がしていた。

そばにはいられないなんて思ったけれど、だからこそ、そう思った。

自分でも、勝手だというのはわかるし、現金だな、と思うが。

俺は、元々裏方の人間なわけだ。

昔から、主人公体質のやつが突き進むのに付いて行って、適当に狩り残した枝葉を回収するようなタイプだと自負している。

伊達に俺を25年もやってはいない。

性質にも文字通り『裏方』ってあるしな。……………お願いだから笑い事にしておいてくれ。まだ時々ステータス見て哀しくなったりするから。

それでも、こんな事になって、必死になって情報を集めて、せめてどこかで俺も攻略するのに貢献しないと、なんていうことを、柄にも無く思ってしまったわけだ。

責任がある立場だと思っている割りには、俺の持つ手札は哀しいほどに少ない。

遅かれ早かれ、実力のあるプレイヤーならば解るような知識ばかりだ。

もちろん、今もその責任を感じる気持ちは変わってはいないし、やることはやるつもりでいる。

まだ、俺は開発者です、こんなことになって申し訳ないです、なんて事も言える気はしないけれど。

フェイルのように人を集めて、人を思いやって、俺みたいなソロプレイヤーのことまで気にかけるような、そんな人間がここにいると、実際会ってそう感じるのは、やっぱり少し、暖かくなる気がする。

とまあそういう少しの晴れやかな気持ちの元、俺はログインしてから二週間目にして初めて、元々やるうと思っていたことをしに、いつもと変わらず一人で、だが少し気負いも和らいだ形で、ここにやってきたのだった。

バベルの街西部からでて少し行くと、『深淵の森』というフィールドに突き当たる。

初心者が少し戦えるようになったかな、というレベルで訪れることの出来る、つまりは中級者の入り口の為のレベル上げに最適な場所として設計された所だ。

攻略組、と常から呼ばれているような元・廃プレイヤー達は、これまでの二週間で通り越しているし、

怯えつつも、フェイルのような人間のお陰で少しずつ立ち直り始めた初心者プレイヤーには少し早い、そんな場所。

俺も、ひたすら今開放されているダンジョンをソロで回っていたため、ここには既に来たことがあるし、モンスターの確認も終えて

いる。

ただ、その時の余裕のない俺が、見ていない場所があった。

その場所は、別にレアモンスターが出てくるわけでもない。

決して、良いアイテムが出るわけでもない。

そんな、特にプレイヤーにとって都合の良いわけでもない場所に  
行くことと思いついたわけは、今の時間帯にある。

後一時間ほどで日が暮れる。それは明日以降になってしまっただろ  
う。

正直、それでも不都合があるわけでもない。

でも、フェイルが立ち去って、コーヒーが美味しいと思って、あ  
いつもそう言って。

その場所に、行きたくなった。

自分でもわからないけれどそんな時がある。わかってもらえるだ  
ろうか？

街を出て、森に入って20分程、ふと、俺は違和感に気づいた。

(……………追っつけられてる?)

さすがに人が少ない場所だとは言え、誰もいないわけではないか  
ら、多かれ少なかれ狩りをしているプレイヤーはいる。

ただ、先程から俺が一直線で進む場所に、一定の距離で付いてくる三人のパーティがいるようだ。

なにせ一番目の性質は『臆病者』な俺。

索敵は任せてくれ。

というかこの能力が意外と使えたお陰で、俺はソロ狩りとしてなかなか効率よくやっていけている。

……この性質を誇りたいかと問われれば、ノーコメントでお願いしたいが。

先ほども言ったが、これから向かう先は中心部でもないし、俺のような目的以外でそこを目指す物好きなどいないだろう。

それに、俺の更なる性質……『裏方』により、できるだけモンスターと遭遇しないよう<sup>リンク</sup>に行動している俺に離れずついてきているということは、向こうも結構なスピードで進んできているはずだ。

プレイヤー・キラ  
(PKか……厄介だな)

この巻き込まれた状況下で、そんなことをしている人間がいるとは信じたくはないが、盲信もできない。大体、この状況でソロで行動している俺をつける理由など、他には思い浮かばない。

三人の相手をするのは相手のレベルによるが分が悪すぎるし、ここであまり時間は食いたくないのもある。

尾行をまくのならば、まだ目的地が見定められていないであろうここしかないだろう。



「しょうがない、隠れてやり過ごすか」

ここで返り討ちにしてやれないのは悔しいが、それこそ顔を覚えてフェイルにでも注意を促しておけばいい。そう考えた俺はそう呟くと、一気に移動のスピードを上げ、そして、ある程度距離が離れたところで、密集した木陰に身を隠した。

元々の俺の職種が盗賊<sup>シッフ</sup>なのと、外見が黒髪に黒のコートなのも相まって（裏方のせいだけではないぞ）、相当の索敵<sup>サーチ</sup>スキルがない限り、ここに俺がいることは見破られないはずだ。

そして、それだけの索敵<sup>サーチ</sup>スキルがあるのであれば、レベルも相当のはず。相手に害意があつた場合、目的地にたどり着くまでにやられてしまうだろう。

俺の現レベルは24。

入って二週間という期間を考えると結構なレベルに達しているとはいえ、元々がそこまで装甲のない盗賊<sup>シッフ</sup>だ。その速度を用いた戦闘で、一対一位ならどうにかなつたとしても、多人数相手にどうこうできるはずはない。

人の気配が近づいてくるのを感じる。

俺は、息を潜めて、意味もわからず後を付いてくる不審な輩<sup>やから</sup>達の顔だけでも確認しようと、木陰から目を凝らした。

（……………えっ！）

そしてその影を視認した時、俺は声を漏らしそうになるのを何と

かこらえる。

追っつけてきていたのは、予想通り、三人編成のパーティだった。装備と振る舞いから見て、結構レベルも高そうだ。

戦士職二人に、後衛の魔術師が一人。回復役はいないが、それだけ余裕のある面子なのであろう。

ただ、俺が驚いたのは、そのレベル等ではない。

その中の一人を、見たことがあり、知っていたからだ。

先頭をやってくる、黒髪の女性。

スレンダーな体型に、冷静さと伶俐さをたたえる目。そしてその美貌に似合いすぎている眼鏡。

これで腰にレイピアを吊り下げ、軽防具を身にまわってなどいなければ、立派な秘書に視えるであろう。

確か、名を『ローザ』と言ったか。

『言霊』の情報を渡しに行った時に見たから間違いない。

俺は、美人の顔を覚えるのは得意なのだ。

それは、先程俺が入団を断ったギルド。

あの主人公然とした善人に見えたフェイルがマスターを務める、シルバース・ナイト銀の騎士団のギルドマスター補佐をやっている人間だった。

## 六話（後書き）

10/17 Lvを少し調整しました。  
本筋には関係ありません。

## 七話

(……まさか、銀の騎士団の連中が?)

ギルドのマスター補佐がPK?

思いもよらぬ遭遇にそう考えて、俺は混乱する。

つい先程まで、フェイルのような男と、その作るギルドについてのいい印象があったからこそ、余計に思考が乱れていた。

少し躊躇するが、どういうことが確認したいという意味が勝る。

それに、確認するとすれば、チュートリアル期間でいられる今しかない、との冷静な部分もあった。

脳内の迷いとは裏腹に、体は反応する。

音もなく、この二週間で使い慣れた双剣のうちの一本を手にとると、俺は身を潜めていた木陰から飛び出した。通り過ぎかけていた三人は気づくも、まだ構える間はない。

そして、その隙を待っているほど、俺は馬鹿でもない。

狙うのは後方にいた魔術師の男。

「……動くなよ、首への至近距離からの一撃は、ほぼ間違いなくクリティカルだ。防御の薄い魔術師タイプには耐えられないと思うぞ?」

俺に短剣を首筋に付きつけられた男は、それを聞いてコクコクと小さく首を動かした。

それを見て俺も頷くと、このいきなりの状況にも全く動じた様子がない、ローザに目をやる。

「……また会ったな」

「ええ、トールさん。あなたに頂いた情報のお陰で、この世界は初めて塔の一步を登ることができそうです。その節はありがとうございました」

塔の最初の階層を開くための、『言霊』の場所を見つけたかもしれないという情報を持って銀の騎士団に行った時と同じ……本当に嫌になるほど冷静だ。

もしかしたら、こいつは人質としての役に立つ人間じゃなかったか。構わず二人がかりで押し切られたら……

そんな心境を読んだかのように、ローザが言葉を続ける。

「後をつけたことは謝罪します。ですが私達に害意があるわけは有りません、もちろん必要と有らば防衛は致しますが」

そしてあっさり尾行していたことは認め、謝罪と共に腰のレイピアを含み武装を解除してみせる。隣の戦士の男も同様だ。

（随分とあっさりしてやがるな）

その対応を意外に感じながらも、なおも俺は魔術師の男に短剣を突きつけておく。

なにせよ三対一だ、保険はかけておいて損はない。

「……PK目的ではないと？」

「ええ、そんな事をするコフェイルに怒られてしまいます。…

…ネイルを、魔術師の彼を開放してあげてもらえませんか？」

「それだけで、偶々面識があるだけに過ぎないあんたが信じられると?」

「……そうですね、言い方を変えましょう。あなたを襲って得られるメリットと、あなたの情報の価値の利益計算ができないほど愚かだと、私はそう見られているのでしょうか?」

すごい自信だな、おい。

しかし、傲慢に聞こえるその言葉に、俺は不思議なほど納得してしまった。

……その美貌と目線に気圧けあされたわけじゃないぞ。

「……悪かった、俺の勘違いだったみたいだな」  
そういい、捕らえていたネイルと呼ばれた魔術師を解放する。

「まあ、あっさりと捕まったそいつが悪いに30点」  
隣の戦士が、ニヤツと笑って呟く。

でかい。190cmを超えているのではなからうか。  
体格がいいだけではなく、引き締まっているのが解る。

その隆々とした体の上に乗るのは、灰色の短髪の下にぎよるとした目と鷲鼻わしばなを配置した角張った顔。そして目につくのは二の腕にある大きな龍の刺青。

あの、どこかその筋の御方でしょうか? プレイヤーの皆様、我がVRMMORPG【Babylon】は、万人に開かれております。

そんな俺の一步引いてしまった心境にもかかわらず、男は近づいてきて、バンバンと俺の肩を叩いた。

「いいね、お前。嬢ちゃんが気になるって言うから付いてきたけれど、いい動きするじゃねーか。俺はリュウだ、フェイルの野郎と銀の騎士団の幹部をやってる。つってもまだ入団10日目だけどな。よろしく頼むわ」

そしてガツハツハと豪快に笑う。

肩が痛いが、どうやら気に入ってもらえたらしい。うん、結果オーライ。

「ひどいなあ、リュウさん。僕は後衛職なんですから、しっかり守ってくださいよ。これで本当にPK専門の人間相手だったらどうするんですか」

その結果オーライの元はといえば、そのさらっとした金髪をかきあげながら、リュウに文句を言う。

そのリュウとは対称的に細い体格。そしてその容姿は文句なしの美形、西洋系とのハーフの様に見える……見ようによってはフェイルよりも綺麗な顔立ちかもしれない。強面のリュウなどよりもよっぽど騎士団と言った感じがする。

でも、どこか仕草にナルシストさが漂っていて、俺にとってはリュウの方が好印象である。

「でも確かに、今回は僕の負けを認めるよ。ツールさんだったね、僕はネイル、人は轟炎の魔術師、と呼ぶ予定だ」

予定かよ！ しかも二つ名自称ってどんだけ……リュウさんとは違う意味で強者だ。

瞬間的に、俺の中でネイルは残念な二枚目として認定された。異論は認めん。

フェイルのそこは濃いキャラが揃ってるなあ、さすがだ。

とりあえず二人と挨拶を交わした後、ローザに改めて目を向ける。

「で、何で着いてきていたか、話してもらえるんだろう?」

俺がそう問うと、ローザは頷き、少し考えて言った。

「ええ、そのつもりです。ただ、その前に一つお伺いしてもよろしいでしょうか?」

「何だ?」

「……この先には特に何も無いはずなのですが、トルさんはどちらに向かっておられたのですか? 差し支えなければ、教えていただきたいのですが」

なる程ね、それは疑問に思うか。

俺はローザの言葉にそう納得する。

「言うより実際に見せたほうが早いな、隠すもんでもないし。でも、別にアイテムとかそういう実利的なものがあるわけじゃないから、そんな期待はしないでくれよ。そう遠くはないから、そこまで急ぎでもないけれど、歩きながら話そう」

そしてそう言って歩き出す。

後20分もかからないが、この先モンスターには合わないでもないの進んでおきたい。

「というか本当にただ付いてきてたんだな。害意はないとすると、何だろう。」

ギルドに入らなかったことについてかな。



「わかりました。貴方達はどうしますか？ リュウ、ネイル」

「俺は行くぞ、面白そうだしな」

「僕も今更一人で帰る気はしませんよ」

ローザの確認の言葉に、当たり前のように着いてくると答える二人。

ちっ、美人と二人デートも悪くないのに。

内心で思うと、ローザから一瞬冷たい視線が。

……あれ、心読まれた？ というか追尾けられてた俺なのに何でこっちが悪者みたいな目で見るの？

コホン。

取り敢えず、そんなやり取りの後で、俺と銀の騎士団の三人という変則パーティーは目的地へと歩を進める事になった。

その後話してもらうと、後をつけていた理由としては、俺のもたらした情報があまりに正確だったので、どのような方法で狩りをしているのか気になったのだという。

そして、ギルド入りを断られたと聞いて、その情報収集の手法を出来れば聞きだそうと探していたところ、街を出る俺を発見、見ていれば、よくわからない方向へと進んでいく。これは何か在るのかと思ひ、三人で着いてきた結果今に至るといっわけらしい。

聞いてみれば、確かに馬鹿馬鹿しいような普通の話だ。

ローザの態度を見てみると、どうもまだそれだけでもなさそうだったが、害意があるわけではないのは確かのようにだったので、放置する。

多分詮索してもわからん。この人感情表に出ないんだもん。

ちなみに、俺が気になって、等のフラグでは残念ながら無いのだけは言っておこう。

彼女はあの美形かつ善人のフェイルのハーレム要員のようで、裏方の俺には付け入る隙もない。

……甲斐性もないがな。

そうして臨時パーティを組んでみると、三人とも、さすがに大ギルドの幹部クラスだけあって高レベルプレイヤーであった。

ローザは小技の連続で敵を足止めし、リュウさんが薙ぎ払う。

残った敵はこれまた残念な二枚目の割に強いネイルが、後方で詠唱を重ねて焼き払う。

うわ、そりゃこのレベルのフィールドでは回復役いらないわ。圧倒的だもの。

もちろん、俺は盗賊らしくそそくさとモンスターからアイテムを盗んでいましたが何か？

そんなふうに順調に目的地に近づく俺達。

まあ、近いのは俺にしかわかつてはいなかったが。

そんな時だった。

森の中に声が響き渡る。あまり現実では出会わない声。

「悲鳴？」

「……だな、多分こつちだ、100m程先にプレイヤーが三人。モンスターの気配……無し。これは本当にPKかもしれん」

ローザの疑問に、俺はそう答えて走りだす。遅れて三人も続くが、

本気で走る盗賊シーフの俺よりは遅い、何せ全基本職種中最速なのが盗賊の特徴だ。もっともそこまで遠くはない、すぐ追いついてきてくれるだろう。

悲鳴の声は女の人の声だった。……それも、相当切羽詰まったよ  
うな。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

俺は、自分に出せる限りのスピードで、声の方向へと向かった。

## 七話（後書き）

ご覧になって頂いてありがとうございます。  
この後につなげるため、締め部分を少し修正しました。

## 八話

本当に、嫌な予感ばかりが当たることだ。

走り抜けた先では、ある意味ではPK以上に忌避されるような事が起ころうとしていた。

その目の前の光景を見て、即座に意味を悟った俺は、すつと頭が冷えるのを感じた。

正直、内心ではわかっていたのだ。

『アル』は、この世界を、もう一つの世界と呼んだ。

ここは、仮想ではあるが、現実だと。

元々、今回が初の試みとなるVRMMOには、大きな懸念もあった。

それは、これまでは画面内の話であった暴力やハラスメント行為が、実際に行動としてできてしまうということ。

だからこそ、それを行ったことに対する黄色マーカー等があるし、様々な倫理コードでの対処等が存在する。

ただ、それは運営が機能していることが前提の対策であったりもする。

『アル』という、この世界での神とも呼べる能力が前提である、対応策。

しかし、『アル』はあのアナウンス以来、姿を見せていない。

そして、次は、この世界を現実とするための、最終アナウンスだとも言っていた。

それは、現在、運営という名の絶対的立場からの監督が存在しな

いことを意味する。

『アル』にとっては、犯罪者も、被害者も、等しくプレイヤーに過ぎないのだ。

システム上不都合となる場合には別だろうが、仕様上影響を及ぼさないものに対しては、何も行動は起こさない。

そして、この世界には、法律というものは存在しない。

『死亡』に気を取られて、それ以外にも、どれだけ薄氷を踏むバランスのもとに成り立っているものがあるかということにまで、考えが及んでいなかった。

……いや、それは嘘だ。

考えることを放棄していたのだ。

ここは、この世界は、現実だ。

ただ、『死』だけがそうなるわけではない。  
生活するということが全てが、現実なのだ。

俺の索敵サーチにかかっていた人数は三人。

だが、ここには四人いた。

男性プレイヤーが三人、女性プレイヤーが一人。

男のうちの一人が呪術師らしく、女性プレイヤーに麻痺パラライズの呪文をかけて動けなくした上で、残りの二人が押さえつけている。  
その座標がかぶっていたからこそ、三人だと思ったのだ。  
一人の頭上に黄色のフラグが出てはいるが、気にした様子は見られない。

男達が突然の闖入者である俺の方に顔を向ける。その顔に浮かんでいるのは、醜悪で下卑た笑み。

そして、その背後で麻痺の呪文をかけ続けている呪術師の男と目が合う。

っ！

それを見た時、俺の中で何かが弾けた。

瞬間、俺は投げナイフのカードをオブジェクト化し、その呪術師に向けて投擲。そのまま女性プレイヤーを組み伏せている男達に向かってその双剣からの一撃を放った。

三対一だということも、後から来るローザたちの事も、頭から消し飛んでいた。

虚しくナイフは避けられ、俺の双剣もまた、空を切る。

しかし、その行動によって組み伏せられていた彼女は解放された。即座に、俺はその女性を背後にかばうようにして双剣を構える。

飛び退いて避けた二人は、片方は戦士のようだった、背中に担いだ剣を抜き、威嚇するように構えてくる。

そして、もう一人が何事かを呟いた瞬間、俺の動きを絡めようと地面から茨が伸びてくる。

ローズ・バインド  
束縛の薔薇。

咄嗟にそこから飛び退くも、俺はその攻撃により判明した相手の職種に驚愕する。

(なっ！ ……もう一人も、呪術師だと！)

呪術師は、相手の行動を阻害したり、パラメーターを低下させたりすることの専門家だ。<sup>エキスパート</sup>その効果は多彩なものがある代わりに、攻撃力は低い。しかも、モンスターによっては妨害が効きにくい相手も存在する。

壁役の戦士と攻撃力の低い呪術師二人などというパーティは、歪<sup>いびつ</sup>もしい所だ。

明らかに、モンスターを狩る面子ではない。

……一人のプレイヤーを、嫩<sup>なぶ</sup>りながら狩るための、三人だ。

おそらく、交互に麻痺<sup>パラライズ</sup>をかけ続けるつもりだったのか。

その考えに行き付き、吐き気がする。

思考が、得体のしれない憎悪と嫌悪感に飲み込まれる。

「……………っ」

しかし、その感情に身を任せて斬りかかろうとしたその時、背後の、麻痺から解放され起き上がるうとしていた女性から漏れた声に、沸騰しかけていた俺の頭が少し冷える。

そつだ、今は守らねばならない。この背後の女性を。

「……………すまない。あんたを、助けるから」

そつ小声で告げ、さらに攻撃を加えてこようと身構える眼前の男達を見据え、片手を上げて口を開いた。



「待てよ……お前ら、正気か？ 三対一で女を襲うとか……状況わかってんのか」

そして、背後の女性の手をとって何とか立ち上がらせ、後退りする。

「へっ、何だよお前。正義の味方気取りで飛び込んできたわりにはもうビビッてんのかよ、ああ？ わかってねーのはお前のほうだ。こんな訳の解らん状態で、一度も死なずにクリアだ？ 出来るわけがねえじゃねーか、俺たちは死ぬんだよ！ なら、それまで楽しませてもらって何が悪い」

そんな弱腰な俺を見て、戦士の男が構えたまま、俺を嘲笑つかのように笑みを浮かべ言ってくる。

「……なんなら、お前もどうだよ。俺らの後で良ければ混ぜてやるぜ？ 見るよ、そいつはきつと極上だぞ」

そして、それに追従したかのように、一緒になって取り押さえていた呪術師の男が、詠唱を中断し、嘲笑った。

その言葉に、掴んだ腕ごしに女性がビクツと強張るのが解る。

うちの先輩達は本当に優秀だ。

……綺麗なものだけでなく、こんな醜悪な表情まで完全に表現しきれているのだから。

せめて少しでも安心させられるように、掴んだ女性の腕に少しだけ力を込めて、そして嘲笑する男にむけて俺は憎々しげに本心を吐き捨てる。

「クソ食らえ、って言葉を初めて自然に使うよ。下種<sup>げす</sup>が」

挑発するような言葉に、二人が激昂する中、たった一人無言でいた残りの呪術師が、急に背後を振り向く。

チツ、バレたか。

「……………む……………三人。仲間か？ 分が悪いな」

目を細めそう言い、すつ、と手を地に広げ、転移の呪文を用意しようとする。

こいつだけは他の二人とは違う。挑発にも乗らずに決断が早い、このまま逃げるつもりのようなのだ。

少し頭が冷えた結果、俺の後を追って近づいて来ているローザ達の気配に気づき、何とか時間を稼ごうとしていた俺だったが、仕方がない。こちらもやられてしまうかもしれないが、誰か一人でも倒せば、その相手の情報は得られる。

今は、名もわからぬまま逃がす訳にはいかない。

【B a b y l o n】は広く、運営はいない。

ここで逃すと捕らえるのは難しくなるだろう。

後は、ローザ達が何とかしてくれるだろうと考え、相打ち覚悟でも二人は道連れにしてやると決める。

「下がってて、もうすぐ助けが来るから」

そして、そう言って掴んでいた手を放すと、その空いた手を改めて掴む感触があった。

「……………待って……………待って下さい。10秒だけ、三人を同時に

足止めって、できますか？」

その後続く思いも寄らない言葉に、俺は咄嗟に振り向く。

……………初めてきちんと顔を見たが、息を呑むほど綺麗な、意思の強い目をしている。

何がそうさせるのだろう、今も、まだ恐怖に震えているだろうに、そんな彼女の肩を震わせながらも俺を見る目線はまっすぐだった。その手を振りほどけない程に。

俺は、余裕が無い中で考える。

三人同時では長くは保たないが、倒すことを考えず時間を稼ぐだけなら出来なくもない。それに今ならば、一番注意が必要そうな呪術師の一人は、どこかに転移する準備に追われているはず……………  
そう判断した俺は、しかし、一応最後の確認を取る。

「……………できたら逃げて欲しいんだけど」

その言葉には、案の定首を振られた。  
怖くないわけがないだろう。本当の心の中などわからないし、事情も知らない。

それでも、彼女が逃げることも守られることもよしとせず、戦おうとしていることは分かった。

だから、頷く。

「わかった、任せる」

それだけ言うと、俺は行動を開始した。

コートのポケットからアイテムカードを取り出し、転移の陣を構成する呪術師とそこに集まる二人の頭上に投げ上げる。

最も、これはただのフェイクだ。

しかしその意味ありげな行動に三人の目線が集まった所で、持ちうる技能のうち、最速の攻撃を俺は発動させた。

『時雨の舞い』

DEX（器用）とAGI（敏捷）が一定の値に達したプレイヤーが、あるイベントをこなすことで習得できる。

先日、仕様通り取得できたことを確認し、技能イベントを公開したばかりの、おそらく現段階では俺にしか使えない特殊技能。

俺の発した言葉がシステムの流れに乗る。この流れに逆らってはいけない、逆らえば、脳と行動の差異に、行動が中止してしまう。

そして、無事双剣が攻撃の初期動作に入り攻撃を開始した。攻撃によるHPはほとんど減らないが、三人はただ防ぐしか無い。この技は攻撃力は無いに等しいが、複数の相手に攻撃できる上、防御に時間をとらせられる、後衛が詠唱することを見越した時間稼ぎの技能だ。

そんな双剣の乱舞に身を任せる俺の耳に、歌が聞こえる。攻撃の中でも不思議と響く、透き通った綺麗な声。

『彼方へ捧ぐ、風の詠』

『想念いのままに、奏でましょう』

『虚空に揺蕩う、言霊』

そんな歌が流れる中、俺の技能スキルが終わり、その反動である硬直時間間が俺を襲う。

それを見て、憤怒に顔を歪めた戦士の男が防御の体勢を解きその剣を振りかぶるが、俺には不思議と恐怖はない。

（綺麗な声だ……そうか、吟遊詩人だったんだな）

そんな場違いなことすら考える余裕が、何故があった。

そして、振りかぶった剣が振り下ろされる前に、歌が終わりを告げる。

戦士の背後で転移準備をしていた呪術師が顔をゆがめるが、もう遅い。

『永遠とわの終わりを、告つげましょう』

『シルフ・ディマイス  
終焉シユンの蒼風』

最後の詠唱と共に、その技が発動する。

吟遊詩人は、基本的に支援系に優れた職種である。

フィールド等にある言霊ことだまを使い、謳うたい、パーティ全体の防御力を上げたり、仲間に攻撃している相手の動きを止めたりといったことが専門だ。

ただ、この【B a b y l o n】ではそれだけではない。

その詠唱に時間がかかるものの、自分の属性に関する歌では、後方からの攻撃系である魔術師よりも威力を発揮できる場合がある。

彼女の歌は、開発者の俺ですら初めて聞くほど、綺麗なものだった。

そして、その効果も。

「……これは、何？」

ようやく追いついてきたローザが呆然と呟き、それに少し遅れて現れるリュウとネイルも絶句する。

その様子も無理は無い。

何せ、未だ先ほどの三人を取り巻いている竜巻は、その終わりを告げる事なく、目の前でその威力をまざまざと発揮してくれているのだから。中に取り込まれれば、抜け出すことは不可能だろう。

そして、俺の様子で声をかけてきたのが味方だと悟ったのか、糸が切れたように隣でふらりとよるめくそれを引き起こした女性。俺は慌ててその身を支える。

フワツ、と顔にかかった髪から、柔らかい良い香りが漂う。

「う、うめんなさい」

そう慌てていう彼女を何とか支えて、体勢を立て直すと、風が止んでいるのに気づく。

後には、<sup>スタン</sup>気絶状態に陥っている三人の男。

おそらく男達とは相当のレベル差があったはずだが、それでも恐ろしいことにHPを瀕死状態まで追いやり、その上気絶状態まで追加されたらしい。

さすがにこんな犯罪に走ったプレイヤーを野放しにするわけにもいかない。

当分三人が起きそうにないのを見て、俺は、とりあえず状況を把握していないローザ達に事情を話すのだった。

## 八話（後書き）

仕事から帰るとPVが100000を超えてました。

正直こんなにご覧になって頂けていると思ってなかったのびっくりです。本当に感謝です。

後回しにしていたこれまでのもの見直しと改稿をして見ました。

ではまた機会がありましたら。よろしくお願い致します。



## 九話

眼の前の三人を見て、俺は呟いた。

「さて、どうするか」

事情を理解したローザ達 説明を終えた後の、リュウとネイルの激昂も結構なものだったが、それよりも、普段より更に冷たくなったローザの視線と雰囲気のほうが怖かった と俺は、取り敢えず装備を解除させ、『監獄の檻』という犯罪者プレイヤー用のアイテムで動きを封じた上で、その処遇について話していた。

今ネイルが、ローザに言われて団長のフェイルにフレンドメッセージ（ゲーム内でのメールのようなもの、連絡をとる際に使用できる）を飛ばして連絡をとっているらしい。

するとローザが不意に俺の隣にいた、襲われていた女性に目を向け、口を開く。

「初めまして、私はローザ、ギルド、銀の騎士団に所属しています。あちらの二人も同じ所属です。剣士の方がリュウ、魔術師がネイルです。失礼ですが、貴方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ……すみません。私、助けていただいたのにお礼もまだで

私は、さ……あ、じゃなくて、トウレーネ、です。えっと、

職業は吟遊詩人です。このたびは、危ないところを助けに来ていただいて、本当にありがとうございました」

彼女が、そう言って深々と頭を下げる。

トウレーネ、か。そういえば俺も説明や後始末を先にして、自己紹介すらしていなかった。

咄嗟に言いかけたのは、現実での名前だろう。もしかすると、MORPG自体、そこまで詳しくはないのかもしれない。

そういえば不思議だ。

ここから出られなくなって、曲がりなりにも生活しているのに、俺も、他の人間も、このアバター名で通っていて、それを疑問に思ったことはなかった。

まだ、ここにいることを現実とは認められていない、ということなのだろうか。

「私たちは何もできていません。お礼なら、その方に」

俺が、トウレーネの言葉にそんな事を考えていると、ローザがこちらを指さして告げる。

その言葉に、俺の方を見るトウレーネ。

「あ……あの、ありがとうございます。えっと……」

そして、お礼をいって口ごもる。そういえばまだ名乗っていないかった。

「トールだ。……いや、そんなにかしこまらなくていいよ。結果的にあいつらを捕らえたのはあんただからな。綺麗な、歌だった」

そう自己紹介をして、思っていたことを告げる。

「ありがとうございます。これだけは、私の取り柄だからトールさんも、助けてくれた時凄いかっこよかったです。」

その言葉に、につこりと微笑んでそんな事を言うトウレーネ。すこし頬が赤らんでいるのが超絶的に可愛い。

……やばい、こつこつ直球派は苦手だ。

先ほどは混乱で、その意思の強い目しか印象に残っていないかったが、初めて、真正面からゆっくりと彼女を見る。

背はローザと同じ位、俺の肩に目の位置が来るほどだから、160cmは無い程度だろう。

ライトブラウンの大きな瞳に、淡く赤みがかった茶色の髪が似合っている。

ローザと同じく美人なのだが、雰囲気とあいまってそこに佇む様には、可憐、という形容詞が浮かぶ。

バーチャル 仮想現実、リアル 現実を問わず、俺には縁がないような人種だ。

それにしても、フェイルにあつてから、美形に大勢出会う日なにとだ。

「生まれて初めてそんな事を言われるのがこんな状態とはね。で？ あんたはあれをどうしたい？」

俺はそう肩をすくめて言うと、アイテムの中でおとなしくしている（というか身動きはできないのだが……）三人に目を向けた。

言葉が少し邪険になったのは仕方がない。その裏技的な知識でこの二週間は前線にいるものの、基本性能モブキャラ（またの名を村人一号）を自負する俺の防衛本能がそうさせる。

その容姿で、裏方性質の俺にそんな直球で褒めてくるとは、俺がうっかり惚れてしまったらどうするんだ。

……そしてローザさん、こんな時だけ伶俐なお顔を優しく向けるのはやめてください。面白そうなものを見る表情もやめてください。

「……どうしましょう。本当なら警察とかのはずですけど、こういう場合はどうするのですか？」

トウレーネは、少し嫌悪感を目に浮かべそちらを見た後、俺に視線を戻しそう言う。

(しまった、俺の馬鹿野郎。少し落ち着いてきたのに思い出させてどうする……)

自分の気の利かなさに後悔しつつも、ローザ達を見て俺は尋ねる。

「本来なら、こういうのは運営者側でアカウントを削除するものなんだが、今回は期待できない。銀の騎士団で引き取ってもらえないだろうか？」

「ええ、そのつもりです。その件で今団長に連絡をとっているのですが……」

ローザは俺の言葉に頷き、そしてネイルの方を見、それを受けてネイルが答えた。

「はい、今連絡が取れました。そういうプレイヤー用に場所を用意して受け入れるから、転移させてくれ、ということだそうですね。僕も説明のため、一緒に戻ります」

さすがに早い対応だ、頼りになる。

そう思った俺は頭を下げ、頼む。

「すまないな、面倒事を押し付けて」

「いいえ、………では、その代わりに、私どもへこれから先も協力いただけるということでチャラ、ということにいたしましたよ」  
首を振った後、少し考えた後ローザはそういった。

「……元からそのつもりだったけれどさ、あくまで交換条件みたいに言うんだな」

俺がそう言い笑うと、

「それは当たり前だと思います。……犯罪者の男三匹と、見目麗しい歌姫。少々差がありすぎるとは思いませんか」

あれ？ さらつと言ったけれど、何か単位おかしくね？

まあいいか、きっとローザさんは怒らせてはいけない御人だ。

そう思った俺は、華麗にスルーしてもう一つの懸念を話す。

「……こちらの歌姫も、保護してあげたほうがいいと思うんだが」

「もちろん、お望みとあらばいつでも御受け入れは致しますが…

…」

「いや、そりゃギルドに入ったほうがいいだろう」

少し言葉を濁したローザに、俺は言った。

「フェイル様の直々の誘いを断った方のセリフとは思えませんね

……それに」

「それに……？」

「そちらは、銀の騎士団に入らなくとも、もう他に騎士ナイトの方がいらっしゃるようですので」

そのローザのいたずらっぽい笑みと、それまでの話を黙って聞きながらじつと俺の方を見つめてくるトゥレーネを見比べて、俺は頭をかく。

だから、俺は騎士でもなく（むしろ盗賊だし）、一般モラ人なんだって……

そんな俺を見て、さらに可笑しそうに笑うローザ。

お、この人が笑うところ初めて見た、レアだな。笑われているのは俺だけ……

「……………何だよ？」

「……………いえ……………お言葉ですがわびしい人生を歩んでらっしゃったのですね」

やかましい、勝手に人の心を読んで同情するな。

しかも決め付けるな。

……………ええ、そりゃ、こんな美人になつかれた経験は皆無だよ。

って、リュウさんまでニヤニヤしてるし、あなたが静かに笑うのは怖いって、旦那。

「あの、ツールさんはギルドの人ではないんですか？ だったら私も……………まだ、お礼も全然できていませんし、それに、私戦いとかに慣れていないんで、厚かましいですけど教えて欲しいというか……………」

そして、トゥレーネが空気を読んでか読まずか止めをさしてくる。

……………ああもう、わかったよ。覚悟決めればいいんだろう？

「わかったよ、あんなことがあった後、一人で放り出すわけにもいかないしな、とりあえずトゥレーネはさっきのを見るかぎり戦力になりそうだし。自分の戦い方を覚えて、身を守るようになるま

では手伝ってもらおう。フレンドリストの登録、わかるか？」

俺は半ばヤケにそう言って、自分をメッセージでいつでも呼び出せるよう、トゥレーネをリストに登録し、パーティに迎え入れる。

……………だから、そんな嬉しそうに笑わないでほしい、耐性無いんだってば。

その様子を見て、三人を転送させたネイルまで、こちらを見て笑っている。

お前は笑うな、残念な二枚目のくせに。

「……………では、名残惜しいが僕は戻るよ。皆はどうするんだい？」

そんな声が聞こえたわけでもあるまいが、ネイルが俺達に向かってそう聞いてくる。

「そういえば、そうだったか、いい時間ではあるな」  
俺は当初の目的を思い出し、そう呟く。

そして、トゥレーネ達を見て言った。

「トゥレーネ、パーティ結成の記念だ、いいものを見せてあげよう。お二人は、どうする、すぐそこだしせっかくだ、来るか？」

「私達がいて、お邪魔じゃないのかしら？」

……………だから、もういぢめないで下さい。

少し悲しい顔をした俺の肩を、リュウが叩いて言う。

「男ならしゃんとしろ、しゃんと……………で？ どこにいきたい

んだ？」

心強い、らしい言葉と、行く気満々な言葉が帰ってきた。まだこの方がいい。

「こつちだ。もう近いはずだから」

何故こうなった。俺はそんな事を思いながら、ようやく目的地に向けて本格的に足を進めた。



## 十話

先ほどの戦闘の会った場所から、森の中を歩いて五分程、俺は、トウレーネ、ローザ、リュウの四人でパーティーを組み、当初の目的地にやってきていた。

トウレーネは、先程からローザと話しながらも、俺の方をチラチラと見ている。

懐く、という言葉が正確なものかは分からないが、どうも、あの状況が彼女の中で美化された結果……俺にとって居心地の悪いこの状況になっただけらしい。

素直な美人に目を向けられて、生意気に居心地が悪いとか言うとは何様だと思われるかもしれない。

しかし、思い出してくれないか？

俺は、『臆病者』『優

柔不断』、そして、『裏方』だ。……いや、言っていて哀しくなる、やはり忘れてくれ。

「……………」は？ ただの行き止まりのようですが、なにかあるのですか？」

ローザが、戸惑ったように尋ねてくる。

トウレーネやリュウも、あたりを見渡しているが、不思議そうな表情を浮かべている。

「何も無いよ……ただ、これから起こることを、たまたま知っていてな。三人とも、少しだけ時間をくれないか？ もうすぐだ」  
俺は少し苦笑して、答える。そう、もうすぐ、日が暮れる。

ローザの感想も無理はない。

ここは、『深淵の森』の奥にある、このフィールドにおける最終地点の洞窟から、少し南に外れた場所。

アイテムがあるわけでもなければ、モンスターもいない。

従来のRPGで、画面の中のアバターを操作する場合であれば、

「おい、行き止まりなのに宝箱も何も無いのかよ！」

と画面に突っ込んで（声に出す、出さないは、皆様の自由となっております） 来た道に戻るだけの場所。

他のゲームで、そんな経験が実際にあった俺が、このVRの世界バーチャル・リアリティの構築に携わる上で、それでも敢えてこだわったもの。

（……何とか間に合ったな）

俺は内心でそう思い、眼の前に広がる、透明な深い闇のような泉を目をやる。

『深淵の森』

言葉の通り、樹々に頭上を閉ざされた、闇深い森。

正直、俺が言うのも何だが、RPGのダンジョンによくある設定だ。

。少しだけ、ほんの少しだけ違うのが、これから起こるだろうこと

「……………始まった」

俺のその言葉に、三人がこちらを見る。

「……………これが見たくて、ここに来たんだ。この状況で、この先、きついことがもつと起こるだろう……………だからこそ、この世界にも少しは綺麗なものもあるって、見たかったんだ」

そんな三人に、俺は呟く。

変化の兆しが訪れはじめた、ただのフィールドの一部である、森に湧き出す泉のグラフィックを、静かに指し示しながら。

【B a b y l o n】では、現実と同様に時間が流れる。  
何も変わらず、太陽は東から昇り、西へと沈んでいく。

実際この世界を球体で作っているわけでは無いが、全ての『言霊』が開放され、全フィールドに行くことが出来るようになると、『バベル』を出て一定方向に真っ直ぐ進み続けられれば、街の逆側にたどり着くようになっていく。

それで、俺が考えたのが、この、目の前の情景。

とはいえ、俺は仕様とデザインのパーツを色々とまとめて、お願いしただけ。実際に見るのは、この中でと決めていた。  
タバコカートンの報酬で、俺の妄想の実現に協力してくれた、グラフィックデザイナーの先輩には感謝の念に耐えない。

頭上には、太陽の光をほとんど遮おかくっている樹々。

ここは、この森の南西の端……………少し戻った先の樹々のトンネルを西にくぐると、そこにはまだ開放されていないエリア、『熱砂の砂

漠』が広がっている。北には洞窟のある山が莊嚴に聳え立ち、東にはバベルへと続く道が存在する、深き森の名も無き場所。

太陽がその役目を終え、紅く輝きながら眠りにつく時間。

その、長い一日の、限られた数分間、ある一定の角度からのみ、木漏れ日が挿し込む場所がある。

計算に計算を重ね、実現した場所。

闇深く、閉ざされていた泉を、夕日の橙色が照らし始める。

「……………これは、すごいもんだな」

「綺麗……………」

リュウと、ローザの声が聞こえる。

その光りに照らされた先には、その本来の姿を現した泉。

線状に漏れる光が、配置された泉の中にある水晶に乱反射し、色とりどりのハーモニーを奏でる。

そんな、光の競演が織り成す幻想的な光景の中、不意に歌声が響く。

呪文の詠唱ではない、純粹な歌。

息を止めたように、光景に見入っていたトゥレーネから、漏れ聞こえる声。

それは、少しづつ大きく、光の波に乗るように奏でられていく。演奏も何もない、ただただ透明な歌声。

だが、俺達はそれをただ、自然と静かに聴き始める。

夢を求めて、ここに来た。

希望を胸に、ここに来た。

夢は現と混ざり合い、

絶望と共に、ここに居た。

光は安寧、人は言う。

闇は混沌、人は言う。

そして私は、知りました。

優しい闇を、知りました。

闇にその身を寄り添えて、

私の心はさざめいて、

そして私は歩き出す。

夢の終わりに、歩き出す。

そして、聞き終わると共に、体温が上昇するのが解った。

(……………)

そんな俺の内心とは関係なく、静かに奏でる声の終わりと共に、  
光の競演もまた、終わる。

後には、沈黙と、静かな闇が広がるのみ。

パチパチパチ、と拍手が鳴る。

その音にはつとして、俺も、手を鳴らす。

ローザが、そんな俺の方を見て、微笑<sup>わい</sup>っている。

俺は今、どんな表情でいるのだろうか。

向けられるのは、とても、綺麗な微笑。

脳裏<sup>なうら</sup>を過<sup>か</sup>るのは、とても、嫌な予感。

そして、微笑が極上の笑顔に変わり、淡々と告げられる。

「……………やっぱり私達、お邪魔だったでしょうか？」

……………お願いです。これ以上いぢめないで下さい。

情けない顔をしていたのだろう、他の三人がそれを見て笑う。

そして、そのうちに俺もつられて笑い出す。

ここにきて初めてかもしれない、こうして苦笑でもなく、心から笑うのは。

そうしているうちに、本格的に日が沈み始める。

そろそろ、宿に戻る時間だ。今日は、色々なことがありすぎた一日だった。

「本当は、色々と聞きたいこともあるのだけれど、今日はやめておきます。……いいものを、見せて頂きました。また、次も機会がありましたら」

「借りができたな、何かあったら、いつでも言ってこいよ」

そう言ってくる二人に、俺も頷いた。

「いや、一人で見ようと思ってたけれど、大勢で見ると、悪くないな。……いい歌も、聞けたしな」

そして後半は、照れくさいながらも、トゥレーネに告げる。

一人であちこちのダンジョンを飛び回って過ごした二週間とは違う、不思議な感覚。

【B a b y l o n】にログインして15日後、その夜宿に戻った俺は、久しぶりに深い眠りについた。

## 簡易登場人物パラメータ

【トール Lv・24】

職種：盗賊<sup>シーフ</sup>

主要武器：双剣

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

【トウレーネ L V・15】

職種：吟遊詩人<sup>バード</sup>

主要武具：棍<sup>こん</sup>

属性：風

性質：純真・温厚・歌姫

【ローザ L V・27】

主要武具：細剣<sup>レイピア</sup>

職種：戦士<sup>ウォリアー</sup>

属性：霧（水）

性質：冷静・慎重・女帝

【リュウ L V・26】

主要武具：大剣<sup>グラン・ソード</sup>

職種：戦士<sup>ウォリアー</sup>

属性：地

性質：豪胆、勇猛、ギャンブライ



## 十話（後書き）

眠い中勢いで書き上げたけど、少し無理くりになっちゃったかも。とりあえず投稿、してみます。

10/22 12:00 起床後、誤字修正

正直関係するといえばするししないといえばしないんですが、Lとかパラメータの設定どうしよう、とか。多分数字書いてもしょうがないんで、STRとかINTとかは必要な場面とかを除いて省かせて頂きますが、ご了承ください。

後、作者の甘えなんですけど、もしも性質で良い単語、ご存知でしたら教えて頂けたら幸いです。思ってたなかったキャラが出現した時に地味に考えるの楽しいんですけど、時間がかかりそうなんで…  
…あ、『地味』もありだな。うん。

## 一話

【B a b y l o n                    チュートリアル開始    16日目】

窓から差し込む光と共に、俺は眠りから覚め、目を開けた。

不思議なものだ、現実には、起きるためには、目覚まし時計が必須だったのに（むしろそれでも二度寝デフォルト……）、ここに来てからは、朝日が差し込むと共に自然と目が覚めるのだから。

この二週間で慣れた、木造の一室。

俺は、オブジェクト化したままの双剣を手に取り、いつものように食堂へと向かう。

ここは、始まりの街『バベル』西部にある名も無き宿屋の一つだ。恰幅の良いおばさんのNPCが経営している（基本AIが『アル』に影響されているようで、結構会話が成立するのが驚きだった）、朝飯が美味しい俺の住処<sup>すみか</sup>。

他はレンガ造りのモダンな雰囲気であるのに対して、ここは木造で大通りからも外れた場所にあるため、俺以外にはここを使っている人間は今のところいない。

そもそも、200万人以上が同時にログインするのもザラである世界だ。

現在ログインしている15000人程度なら、この街だけでも余裕がありすぎる。

しかし、人気があるうがなかるうが、目の前にあるのはふかふか

のベッド、清潔なシーツ、そして朝日の挿し込む東南向きの窓。

……俺の現実の家である、アパートの一室等よりも健康的で快適なのは間違いない。

いまさらだが、この世界について、説明しておこう。

この世界には、フィールドからフィールドの間に、町や村が点在している。

それぞれに和洋中の特徴があり、この『バベル』の街並みは西洋風で表現されている。

そう、西洋風なのだ。

そんな中で、俺が、大通りから離れた便利でも無いこの宿に滞在することを決めたのは、今俺の目の前で落ち着く香りと共に湯気を立てている、それにあつた。

白いご飯に味噌汁。そして、絶妙な塩加減で調理された、いい焼き色の付いた赤身の鮭。

やっぱり朝は味噌汁だろう？ ……現実ではカロリーメイトが多かったが。

ところで、基本的にNPCの作成する料理は、いくなれば普通である。

まずくはない、しかしわざわざ通う程でもない。そんなところだ。近頃は、『料理人』であるプレイヤーの店なども出てきたようだが、まだまだLvが低いためかそこそこのレベルでしか無い。

例えば、俺がフェイルと会った喫茶店は、実はプレイヤーの経営する店だが、そこはコーヒーに特化しており、他のケーキ等はあまり美味しくない。……見た目はいいんだよ？ 見た目はね……。喫茶店だからコーヒーが美味しければいいとも言えるが。

しかし、しかしだ。

この宿は西洋風である『バベル』の中で、数少ない和風の食事が出る宿。

しかも、美味しいのだ。昼や夜は別の場所で食べたりするが、俺はまだここ以上のものを食べたことはない。

もちろん、そんな例外なのだから、その分不都合もある。

……………俺はここに来てから二週間、ずっとこのメニューを食べ続けている。

何故か？

それは、このお品書きを見たら理解してもらえたら理解してもらえらるだろう。

< お品書き >

朝の部

焼き鮭定食（味噌汁・卵付き）……………50 n<sup>ナール</sup>r。  
宿泊の方は無料。

昼の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・漬物付き）……………50 n<sup>ナール</sup>r。

夜の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・大根おろし・漬物付き）……………50 n<sup>ナール</sup>r。

烏龍茶……………10 n<sup>ナール</sup>r

ビール……………30 n<sup>ナール</sup>r

白雪の酒……………100 n<sup>ナール</sup>r

攻撃力アップ効果 稀にステー

わかったか？ ……いや、感想はいらない。

きつと、ありとあらゆるツツコミはこの二週間で俺が終えている  
(果たして誰だ、こんな宿を作ったのは……)。

それでも美味い。しかも和食。俺は、これを越える『料理人』プレイヤーが出るまでは、ここで食べ続けるだろう。

……早く出てきてくれないだろうか？ 頑張ろうよ生産職の皆さん。

コホン。

ところで、初めてご登場願ったが、ここでの通貨は共通でn rと  
いう。

基本的には、1 n r = 10円で考えてくれればいいと思う。

ちなみにだが、モンスターを倒してもお金は得られない。

代わりに落とす<sup>ドロップする</sup>、素材アイテムなどを売却することで、日々の収入を得られることになっている。

これが曲者で、プレイヤーのキャラクターのみならず、NPCで  
すら値切ってくる(誰だよこんな仕様考えた奴……)。  
ノン・プレイヤー・キャラクター

しかも、全体での流通により相場が変わるため、例えば季節によって素材の購入金額が変わる。

現在の俺はと言えば、情報収集のため(本当だぞ?)、雑魚モン

スターの落とすレアアイテムなども効率よく集めることができたのと、『言霊』の情報をローザに買い取ってもらったため、結構裕福である。

せつかくなので、『言霊』についても少し言及しておこうか。

『バベルの塔』の中は、迷宮型のダンジョンとなっている。

広さとしては、500m四方の立方体。上空から『バベル』を見たらならば、綺麗な四角形が二つ重なっているように見えるだろう。

1階層ごとに、次の階層へ至る為の広場には、一体の『守護獣』<sup>ガーディアン</sup>、つまりボスモンスターが存在する。そして、厄介極まりないことに（すいません考えたの俺達です）、一定期間でその『守護獣』<sup>ガーディアン</sup>は復活し、再度倒さなければ広場を通ることはできなくなる。

しかし、ただ一つだけ、各階層の広場にある『言霊』を開放することで、『守護獣』<sup>ガーディアン</sup>の復活もなくなり、街にある『マルドゥク神殿』から、塔の開放された広場に転移することが出来るようになる。

ちなみに、これまためんど……いや、凝った造りになっており、『言霊』の出現場所はある程度以上には決められていない。

何故ならば、それはモンスターに宿っているからである。

モンスターを倒せば、『言霊』の封じられた水晶がドロップし、その水晶を塔の内部の広場にある対応する窪みにはめれば、開放されることになるのだが、このモンスターがまた曲者なのだ。

一度誰かがマークすれば、居場所が判明するものの、特殊な技能<sup>スキル</sup>をもっているものや、やたらと逃げ足が早いものなど、一筋縄ではいかないモンスターが、決められた範囲のフィールドやダンジョンのどこかに湧出<sup>ポップ</sup>する。

……………一応言っておくが、このアルゴリズムを考えたのは俺じゃないからな。

これは、難易度に文句が多いユーザーのスレとか見てほくそ笑むような、額に『DS』って書いてそうな先輩ひとの作品だ。

ちなみに俺も全容は把握していない、なぜなら、俺ももちろん【Baby Ion】が完成したらやりますよ、って言ったらさ、「じゃあお前は知らなくていい」、って言われた……………あの人本物なんだよ。自分の仕事量増やしてまで、ゲームの中の俺に必死で『言霊』探させたいんだよ……………。

以上だ。わかってもらえただろうか？ 思考がただ漏れているのはいつものことだと諦めてくれ。

「ふう、やはり朝飯は味噌汁がいいな」

俺が満足してそう呟き、いつものようにいつもの朝食を平らげた時だった。

ガチャ、と木の扉が開き、宿に人影が入ってくる。

伶俐かつクールな眼差しに似合う眼鏡。

笑うと怖い、とても珍しい女性が、そこにいた。

もちろん、銀の騎士団キルドマスター団長補佐、ローザその人である。

そういえば先日別れるとき、トゥレーネの宿などについても任せきりにしたのだったが、「明日、何点かお伺い出来なかつたお話があるのですが、大丈夫でしょうか」と言われたのだった。

こちらに気づき、頭を下げ、近づいてくる。

何故か、自然と背筋が伸びる俺。

…………… 出会って二日目にして、既に苦手意識が芽生えた俺は、今日の平穏な朝は短かったな、などと思いつながら、立ち上がった。



## 一話（後書き）

今回は短めですみません。

生みの苦しみ < 読む楽しみ。

はい、今日は他の小説読んで、書く時間が短かった作者です。

前回で区切れたかは怪しいですが、今回からは二章ということになります。

話が進むかとおもいきや……お品書きにあつたので、二章の第一話はお金の単位とか、諸々の説明にあててしまいました。

通貨単位、『ナール』はイラクのディナールからとってきました。

何でイラク？というと、バベルの塔のモデルとして最も有名なのは、

「ウルのジツグラト」というものだそうです。

ウルは、イラクでバグダッドからクウェート方面に350kmほどの場所にあります。

ちなみに、バベルの塔のあったと言われるメソポタミアの古代都市「バビロン」。古代メソポタミアとは、主にティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地帯で、イラクの殆どがその地域に該当します。

そんな感じで通貨を決めてみました。

読んでいただいてありがとうございます。

二話（前書き）

10/23 13:40 ローザとの会話内容を改稿しました。

## 二話

俺の周りの風景が、どんどんと流れていく。

今俺は、過去最高の速度で走っていることだろう。きっとオリンピック選手も真っ青だ。

ここは、『バベル』の街から南に広がるフィールド、『紅の平原』

視界を流れるのは、赤土が延々と広がる平原とそこにそびえるむき出しの岩肌、それをとどこどこに覆う、もこもこした形状の緑色の植物たち。

高さにして、俺の腰ほどまではあるだろうか、丸い形状は、とても柔らかそうさだ。

もっとも、実際に近くまで行けばわかるが、表面は細かく鋭利な棘が並んでいるため、取り囲まれ押しつぶされた日には、一瞬でHPが削られてしまうだろうが。

しかし、遠目から見るそれが立ち並ぶ光景は、正直癒されなくもない。

……………今俺が、まさにその植物型のモンスター、『モコ Lv 18』の群れに追いかけられているところでなければ、だが。

（なんだよこの俺の全力に付いてくるモンスターは！？ こんな仕様に作った覚えはないぞ……………？）

俺は涙目で毒づきながら、必死に足を動かす。

今にも、俺の背後に迫ろうとしている『モコ』。  
元々は、非アクティブ系（こちらから攻撃を加えない限りは何もしてこない、その代わりなかなかレベルが高く強い）の植物モンスターのはずである。もちろん、植物だけあり、そこまで行動速度も早くはない。

そんなモンスターが、何故こうして、基本職の中で最速を誇る盗賊である俺のスピードに付いてきているのか、それは、その群れの中心にいる一際大きな『モコ』の額に、『言霊』を宿した水晶が埋め込まれているからである。

そう、以前に話したよな……俺の開発者の先輩に、『ドS』の人がいるって。

つまり、そういう事だ。

（……………動かないことが条件で強く設定したモンスターに、スピードを加えてんじゃねえ！！！！）

そんな心の叫びは、届くはずもない。

届いたとしても、あの人はこう言うだろう。

「……………うん、頑張れ」

それも、とても良い笑みで。

何故こうなった。

俺は必死で足を動かし、走り続ける機械と化しながら、これまで

を思い出す。

そう、俺は甘く見ていた……あの、クールな才媛を。

「……ここは、良い喫茶店ですね」

ローザが、店内を見渡しながら、そう呟く。

俺は、落ち着いた場所で話をしたいというローザを連れて、フェイルと出会った店に来ていた。

NPCより喋らないプレイヤーである、そのマスターは、無言でいつも通りの美味しいコーヒーを入れてくれる。

………これで、ゲーム内にデフォルトで煙草タバコがあれば完璧なのだが、まだ無い。

まだ、というのは『錬金術師アルケミスト』のプレイヤーが、今開発中との情報掲示板（ウインドウから確認できる、ゲーム内のコミュニティだ）が上がっていたのを昨日見たからだ。

その名も、スレッド 【素材持ち禁断症状者求ム】。

これまでは余裕がなくてみていなかったが、結構あちこちで普通に生活するための話し合いもあるらしい。

先日のような人間もいるものの、基本的には皆、前向きになろうとしているようだ。

それとも、忘れるためにいつも通りを貫こうとしているのか。

生産職でも、戦闘はできる。何故か『料理人』は結構強くなるこ

とが可能で、下手したら盗賊などより肉弾戦に強かったりする。まあ、アクティブスキル戦闘用技能が無いから、本気でやれば別だが。そんな中、アルケミスト『錬金術師』は戦闘に向いていない。その代わりといっちは何だが、この世界に存在しないもの（理論や構築の完成などに時間と労力、それにセンスが必要となるが）を、作成することが可能となっている。

例えば、それこそ煙草タバコとかな。

なので、その供給を欲する需要者達が、素材を集めて提供する事になる。

もちろん、俺も参加しようと思っている。

そんな事情もあり、俺は早く行動したいのだが、ローザの話とは何だろうか？

そんな事を思っていると、ローザが話を切り出してきた。

「何点か、お願いとご報告が」

「昨日のことについてか？」

俺は、そう尋ねる。

「……ええ、それもあります」 それにそう頷いて、ローザは話を続けた。

「まずは、先日捕らえたものの処遇についてを、彼等は、私たちのギルドに加えて、他の大手ギルドである『探求者の集い』『円環の理』も含めた3つのギルドで管理する、『牢獄』に入れることになりました。ここでは、被害者の許しが必要ならば、解放はしません」

「……成程。つまり、『B a b y l o n』の三大ギルドで、警察の役割を果たしてくれると、そういうわけか？」

「はい、この状況で早急に取れる対応としては、最善かと。元々、ご存知のようにMMOでは、プレイヤー同士の問題は、できるだけ当事者たちで解決するのが求められていましたから。もちろん、権力の集中を避けるため、平等の立場として、共同で管理を行うことに決定しています。また、無力化した犯罪者プレイヤーを『牢獄』に転送するための道具も、現在ギルド内の『錬金術師』アルケミスト達が作成中です」

「わかった、俺も異存はないし、むしろあっても、その三大ギルドに逆らいはしないさ」

ローザの説明に状況を把握し、俺は頷いた。

そもそも、今回は偶々(たまたま)当事者であっただけで、元々俺個人でどうにか出来る問題ではない。

他の二大ギルドについては、あまり詳しくはないが、悪い噂も聞かないし、何よりフェイルとローザがいるのだ (いざとなったら強面のリュウもいるし) きつとうまくやってくれるだろう。

「もう一点の件ですが、トゥレーネさんは、ギルドの女性プレイヤーのもとにいていただいています。……やはり、貴方以外の男性の方にはまだ抵抗があるようでして。基本、我々のギルドには比較的女性が多いとはいえ、トゥレーネさんは美人ですから目立ちます。トールさん、いつそ一緒にお住みになってはいかがですか? ギルドに協力いただいた見返りとして、住居くらいは融通できますが」

「ゴホッ!」

俺は、後半の言葉に口をつけていたコーヒーを吹いてしまう。

(……………絶対今の、タイミング見計らって言いやがった)

「……冗談ですよ」

そんな俺に澄ました顔を向けながら、ローザはそう言った。明らかに楽しんでいる。皆さん、ここにいちめっ子がいます（涙）

「ナント、カラダニワルイジョウダンダ」

「何故なにゆえ片言のですか？」

（あんたが動揺させるからだよ！ っていうかわかって言ってるだろ絶対）

俺は心の中で、表情を変えずさらっと笑えない冗談を言うローザに突っ込む。

これ以上言葉に出さないのは、ほら、解るだろう？ どうせ、そこからまたいちめ……いや、やめよう。

長いものには巻かれる。強いものには逆らわない。

そう、それが平和に過ごす方法だ！

この女性ひとに逆らうくらいなら、一人でモンスターの群れに突っ込んだほうがまだましな気がする。もちろん特攻なんてしたくはないけど。

俺が人生の何たるかを残念な方向に悟っていると、ローザが更に続ける。

「後、これが最後です。確認なのですが、トールさんが持っている情報を共有するというのは、フェイルにもおっしゃっていたとお聞きしています」

「ああ、もちろんだ」

最初の二つのついでのように聞いてくるローザに、俺は頷いてみせる。



情報の独占等する気もないし、あなたに逆らうなんてとんでもないえ、何でもないです。

「……その言葉に、嘘はありませんよね？」

「？ ああ、くどいぞ？」

念を押すローザに、俺は疑問に覚えつつも、そう答える。すると、ローザの目が、にこやかに微笑の形をとった。

(……………！)

背筋に冷たいものが走る。……あれは、獲物が網にかかったのを確信した目だ。

そして、身構える俺に、ローザはさくつと爆弾を投下する。

「……では、お言葉に甘えてお伺いしたいのですが 現在の状況を、貴方の同僚が解決する可能性は、どのくらい残されていますか？」

「……………！」

油断した後に警戒して、その警戒心すらあっさり乗り越えられた俺の顔に、どうしようもなく狼狽じゆうたいが走る。

「……………どうして？」

何とか俺は声を絞り出した。

そして、それを見てローザは、今度は形だけの微笑うしろひではなく、本当にニッコリと微笑み、俺に止めをさしてくれた。

「確信したのは、たった今です。フェイルもそうなんですが、男の人はどうしてそんなに表情が出やすいんでしょうか」

その言葉に、簡単に引っかかり過ぎではないかという哀れみすら乗っているように感じ、俺は内心で呻く。

……………ええ、腹芸なんてできない、素直ないい子だと言われてすくすく育ちましたとも。168cmだけどな……………ぐつ。

焦って変なことを考えた上に、自爆思考を行なっている俺に、口ーザは淡々と告げていく。

「……………私はMMO通信の愛読者でした。もちろん、【Baby on】紹介の談話記事も読んでいます。内容は、ご存知ですよね？」

(坂上さんの記事か、あれで相当いじられたんだっけ?)  
そう思い当たった俺は、黙って頷いた。

「私が、今の状況に陥った際にまず思い出したのが、そのことです。元々、このようなゲームの開発に携わる人も、同じようにMMORPGをプレイするということが、当たり前前の事なのに、私には新鮮に感じられて、印象に残っていた……………そして、その人ならば何らかのアクションを起こすのではないかと、そう思いました」

「……………」

「でも、そんな行動を取る人間はおらず、貴方は全く目立ってい

なかった。もしかしたら、そんな人間はいないのではないか……開発者は今回のことを予期していたのではないか、とまで考えていました」

……地味な裏方で申し訳ない。

「ただ、ある時あなたに注意を惹かれる事があった」

「……………どこでだ。『言霊』の情報を渡した時か？」

「それは、空想が、懸念に変わった時です。……貴方は、他のプレイヤーにモンスターの情報を紛れ込ませていましたね？ 目立たず、でも目立つ人間の言葉を補足するなどして」

俺はただローザの言葉を待つ。

そんな俺を見て、ローザは続けた。

「あるとき、私の情報に貴方は書き加えた。そこであなたの名前を知りました。私が書いたのは『深淵の森』の『トレント』という植物モンスターに付いての状態異常効果について……………貴方が書いたのは、そのモンスターに『光』属性の攻撃を加えると、成長してしまうという注意点」

確かに、そんなこともあったような気がする。

俺が情報を公開し始めて少し経った頃だ。

「その時は、まだ何も思いませんでした。ただ、フェイルが『光』属性のため、伝えておこうと記憶にとどめただけです」

「ご存知のように、このゲーム内での掲示板には、中傷行為を減らす狙いでもあるのか、匿名ではなく、必ずアバター名が表示されますね？ 私は、その後もあなたの名前を何度か見ました。正確な情報をもたらす情報屋プレイヤー。そんな風に考えていました」

「そして、貴方が銀の騎士団に、『言霊』の位置の情報を持って来ました……………その時、貴方が『闇』属性だと知った。それでもまだ、誰かとパーティを組んでいるんだと思いました」

それはよく覚えている。

必要な素材の話題と関連から、属性を話したのだ。

「……………ただ、貴方はその後のフェイルの誘いを断った。

ソロでやると、団体行動が苦手だから誰とも組んでいないと、たしかそのような回答だと聞いています」

「ああ、その通りだ」

「では、何故ソロで活動している『闇』属性のあなたが、他の属性、それも貴方とは反属性となる（光と闇のように属性にも相性が存在する） 攻撃を受けたモンスターの影響を知っているのでしょうか？」

「……………」

俺は、その言葉に黙りこむ。しまった、そんなところで……………そう思うがもう遅い。

「それで貴方の提供している情報を調べました……………少しだけ情報の質に反して収集スピードが早すぎましたね……………おそらく、情報が足りないことでの『死亡』を抑えるためだったのででしょうし、その事から、貴方が敵ではないと、巻き込まれたうちの一人なのだ

と判断したのですが」

そこで、ローザが一旦言葉を止める。

「……………そして、懸念が予想に変わったのは、先日の一件  
リュウなどは、いい場所見つけやがったな、と言っておりまし  
たが、あの場所、元から知っていましたね？」

「……………本当は、一人で行くつもりだったんだが、あの日の俺  
は少し浮かれていてな。他の人に見せるのも、いいんじゃないかと  
思った。どうするんだ？ この事を公開するか？」

そんな俺の言葉に、ローザは首を振る。

「いいえ、今回は確認をしたかっただけです。……………個人的に、  
隠しておきたい気持ちも理解できますし、何より公開したところで  
何の利益もありませんからね。必要な人物にはともかく、口外する  
気はありません」

そこまで言われた時点で、俺に選択肢はなかった。  
静かに認める。

「あんたの思っている通りだよ。まずは、最初の質問に答える…  
……………おそらくだが、後五年は無理だ」

「……………五年、ですか？」  
「『アル』はな、本当に優秀なんだ。さらに言えば学習もするし  
成長もする。そして、この【BabyIon】の根幹部分に関わっ  
ている『アル』を何とかするためには、同等のAIじゃ駄目なんだ。  
性能面で、遙かに超えたスペックでないと、な。……………どんなに早く  
ても、そこまでのものが開発されるまで、五年はかかるだろう」

「成程、では、例えばその五年間、無理をせずここで生活するというのはどうでしょうか？」

「……それも、俺個人としてはおすすめしない。言っただろう？ 最短で五年だ。もしかしたら十年かもしれない、そんな時は、来ないかもしれない。それだけの時間、現実から離れて、本当に戻れると思うか？ 社会的にも、肉体的にも……精神的にもだ」

覚悟を決めた　　いや、決めさせられた俺は、ローザの質問に淡々と答えていく。それは、俺が二週間の間、ずっと考えていたことだったから。

「わかりました。では、貴方の持っている情報は、どんなものがあるのですか？」

「雑魚モンスターの仕様と、ある程度の技能取得イベント……後は、昨日みたいな、攻略には関係のないものばかりだ」

ローザの次の質問に、俺は自嘲気味に答える。

「……成程、わかりました。それは、何かあればその度に聞くとして。では、そんな貴方に手伝っていただきたいことがあります」

役に立たなくてすまない……そんな俺の内心をわかっていそうなのに、ローザは気にした様子もなく、俺に言う。

「……何でも言ってくれ、できることは、やるつもりだ」

「『言霊』のモンスターの居場所は、おかげで判明しました。ただ、問題が一つ生じておりまして」

「問題が？ 何だ？」

殊勝にそっとう俺を見て、真顔でローザが説明する。

「どうも、そのモンスターが手強いようでした、敏捷に優れたプレイヤーが必要なのです、あなたのような……本来は壁役を犠牲

にしてクリアするのかもしれないが、チュートリアルとはいえない。いいえ、だからこそ、誰も『死亡』を出さずに倒したいのです」

「……………わかった、俺は、何をすればいい」

先ほどから思ってはいるが、正直ローザには脱帽している。彼女に逆らうくらいなら、モンスターの中に放り出されたほうがまだと、本気で思っていた。

……………この時まででは。

ローザが、その返答を聞いてニツコリと笑った。いつものあの笑みだ。

もはや条件反射的に、俺は身構える。

「トールさんには、囷として、モンスターの中に突っ込んでいただき、指定の地点まで引き寄せていただきます。もちろん

逃げるルートは確保いたしますし、計算ではトールさんのスピードなら、大丈夫、のはずです」

あつさり警戒など乗り越えられる。

って学習しろよ俺。さっきと同じパターンじゃねーか……………

といいますか、あの…………… 比喻でなく、本当にモンスターの中に突っ込めと？ さっきマシとか言ってごめんなさい。 覚悟はあつさり崩れ、情けない目で見える俺に対して、ローザは笑みを絶やさない。

これが噂の『二重の束縛』ダブル・バインド

前門の虎、後門の狼、というやつですね。わかります。

そして数秒後、俺は力無く頷いた。

そして今、俺は走っている。

背後には結構距離を詰められている気配がプンプンしている。

はつきり言って、怖い。

俺のこの何ともいえない感情は、モンスターを作った先輩に向ければいいのか、状況を作ったローザに向ければいいのか、はたまたこんな世界に追い込んだ『アル』に向ければいいのか。

とりあえずわかっていることは、誰であれ言い負かされて終わるだろう、ということ。

俺に出来ることは、この先の地点まで『モコ』達を誘導することだ、ということである。

誰か、誰か俺に癒しを…………… 『モコ』がスピードを上げる。

お前じゃねーよ、勝手に心読んで反応するんじゃない！

半ば涙目になりながら、俺は走り続ける。

何とか作戦が成功した後、その日一日は、ぐったりと何も出来なかったのは言うまでもない。





## 二話（後書き）

はい、今回の主役はローザさん。  
取り敢えず開発者バレしました。

そして、隠れ主役は『モコ』です。

僕の描写では、おそらく表現しきれないため、参考画像はこちら  
の一枚目の写真ですね。

<http://labaq.com/archives/51697856.html>

こいつがもうちよいでかくなって、高速で追いかけてくるところ  
を想像してみましょう。しかも追いつかれたらアウト……その時ト  
ールの気持ちがあわかって頂けたら、幸いです。

トール、生粋の裏方でありながら、主役級美女が裏で動くのを好  
むことで表にはじき出される男……

では、予約投稿して眠りにつきます。誤字脱字は起きたら見ます。

読んでいただき、ありがとうございました。

ご指摘を頂き、設定書き追記

後三話後位に登場します（予定は未定）、何か急に思いついたりし  
なければ

この世界の属性

『反属性』

火 水  
地 風  
光 闇  
無

アイテムにも様々なもの（回復役や投げつける攻撃アイテムから、設置型の罠など）があり、回復役などは属性なし、ダメージ判定を持つものは各属性をもちます。

それが自分の属性であれば効果が二倍、反属性であれば使用できない、または特定のアイテムは使用出来ても効果が半減します。

なので、『闇』属性のツールは『光』属性の攻撃はできません。でも、公開しちゃいました、迂闊。

しかし裏方はその人生経験から、誰かが自分のことを注意して見ているとは想像しないのです。なぜなら目立たないからこそその裏方。

無属性プレイヤーは、どの属性アイテムでも使えます。また、自分の属性関係なく何でもアイテムを使える職種・性質もある予定、どう出すかは微妙。

ちなみに言うと、生産職は、全て無属性となります。

以上、おいおい色々情報出てきます。

## 閑話 ある開発者の一幕（前書き）

お陰様で、10万PVを超えていました。

感謝の念に絶えません。

ちなみに、少しローザとのやり取りに違和感との感想をいただき、二章二話、ローザとの会話を修正致しましたので、ご覧になっていただければ幸いです。

今回は閑話です。

言うなれば三人称と、ゲーム外の世界を描く練習ですが。よろしければご覧になって下さい。

本編続きは書け次第今晚、無理なら明晩投稿いたします。

## 閑話 ある開発者の一幕

） 西暦2027年10月24日（日） ある開発者の休日 ）

事件から、二週間が経過していた。

それが世間に発表されてからは、激動の一言に尽きる。

広報の電話は、今も鳴りっぱなしだそうだ。

マスコミは連日、無責任な報道を続けている。

VRMMOとは何か、原因は何か、ネット社会に生きる若者の心の問題に至るまで、自称専門家が語っていた。

ある意味、ここまでVRMMOが世間のすべての人間に認知されるのは初めてのことだろう。

ネット上では、『羨ましい』と『不謹慎』という言葉が連日バトルを繰り広げ、その騒乱はとどまるところを見せない。

中には、本当はすぐにも救出できるのに、VRシステムのデータを取得するためにプレイヤー達を犠牲にしている、などという陰謀論まで飛び出す始末。

これも、自称専門家が、仮想現実に取り込まれるなどありえないログアウトさせることは理論的に可能なはずだ、というさも都合の良い希望的解釈を語っているからだ。

本当に現場にいる昇達からすれば、「誰だお前」と言いたいところだが、そんな機会は訪れることはない。

（実際にここに来てみる。この状況で何が出来ると言っんだ）

そんな情報の氾濫に吐き気を覚えながら、須藤昇は目の前に開い

たPCのブラウザを閉じる。

よく、営業に行った先でその筋の人間と間違われるその強面の顔は、今も不機嫌そうに歪んでいる。

晃は、缶コーヒーがなくなっているのを見て、ついでに煙草を吸いに行こうかとポケットの小銭を取り出し、習慣で斜め前の席に目を向けた。

空席。

晃の遊び道具が居たはずのその席は、この二週間、埋まることはなかった。

どこにいるのかはわかっている。

今月、嬉々として自分の作ったモンスターを倒しに、その世界に旅立った男は、休暇が明けてもなお、晃の元に戻っては来なかった。

「……………」

晃は、無言のまま席から立ち上がり、喫煙所へと向かった。近頃は、どこも愛煙家には厳しい世の中だ、オフィスから出て、わざわざ指定の場所まで歩いていかなければならない。

税金は上がり、場所は奪われる。全く、ままならない世の中になったものだ。

ビルに囲まれた一角。黄色のラインで区切られた、晃のような喫煙者が集うその場所だが、今日は本来ならば休日であることも先立

って、人間の数はまばらだった。  
そんな中、紫煙をたゆたわせている見知った顔を見つける。

その男は、近づいてくる晃に目を向けると、吸っていた一本を灰皿に押しつぶし、上着の胸ポケットから新しい一本を抜き出した。どうやら付き合ってくれる気らしい。

男の名は海堂圭一。かいどうけいいち

180cmを越える身長に、細長い手足、この業界に来るまではモデルをやっていたという変わり種。晃の同僚にして、内外に評価の高い、腕のいいグラフィックデザイナーだ。

プログラマである晃とも仲がよく、よくあいつで遊んでいた。確か、強請よたられて、色々細かいグラフィックを作っていたはずだ。

「……………暇そうだな」

圭一が晃に声をかけてくる。

「……………お前こそな」

晃はそう答え、自分も煙草に火をつけ、ふう、と白い煙を吐いた。煙が、空気に混じり合って、消える。

現在、オフィスには【B a b y l o n】開発に関わったうちの半数が詰めていた。

あれだけの騒動の後、どこから嗅ぎつけてくるのかマスコミが家まで押し寄せてくることもあるためと、「待機」という名目で人がいなければならなかったため、晃達は開発メンバーは交替でここ、【B a b y l o n】システムにアクセスするビルに来ている。

………何か出来るわけでもないのに、だ。

『アル』にその端末のアクセス権を奪われた今、晃達にできることなど何も無いのが現状である。

やっていることといえば、プログラムコードを見て、バグを発見してしまうことくらい。

発見できたとしても、修正を行うこともできないというのに。というかあの馬鹿、致命的なものはないにしろ、バグを何個か残していきやがった。………影響がないといいが。

晃はそんな事を内心で思う。

あれから、『アル』は、現状の状態とそれに関わる全てを全世界に公開した後、誰の前にも姿を見せていない。

文字通り、ネットワークの波の中に消えてしまった。

その後、調査を行うメンバーから、物理的にサーバー、そして『アル』の本体があったスーパーコンピュータを破壊するという案が出て、検討された。

晃達からすれば、馬鹿なことを言うな、といったところである。

21世紀初頭から始まった、データのクラウド化によって、今ではプログラムや、それに関するセーブデータなどは、世界中のデータセンター（保存する場所で、地震などの災害のないとされる場所に多く配置されている為、様々な業界のシステムがそこを用いている）に分割され、暗号化されて保存されている。

ソフトウェア（簡単に言うと、エクセルやワード、のような



プログラムのことだ）　が『アル』に抑えられているなら、ハードウェア　（これはPC本体のような機械のことである）　を壊せばいいと思ったらしいが、そうするのであれば、そのものを区別して壊すことなどできはしない。

わかるだろうか？　PCが壊れれば、何の変哲もないデータも、奥底に隠してあるかもしれない18禁データも、これまで集めた色々な情報がもれなく失われるのだ。

そして、バックアップごと壊さなければ、今回は意味が無い。何せ、壊れても大丈夫にするためのバックアップシステムだ。メインだけ破壊しても意味はない。

特に、世界初のVRMMORPG【Babylon】のデータ量を舐めてもらっては困る。

150000人のために、様々なサイトの、様々な情報を壊して、さらに世界規模のネットワークに、経済的にも物理的にも影響を与えていいのならば別だが。

しかもその場合でも、プレイヤー達の安否は不明。いざとなれば電脳世界に潜り込めるほどの性能を持つ『アル』に、影響があるのかも不明。

言うまでもなく、割りに合わなすぎる賭けだ。

……………　いつそそれならば、あの馬鹿で素直な遊び甲斐のある後輩が、クリアして戻ってくるのに賭けるほうがまだましだ。

文字通り、苦渋の選択だが。

「……無事、帰ってくるだろうか」  
「帰ってくるぞ」

圭一の呟きに、晃は反射的に答える。  
そして、内心で願い、謝罪する。

(……………すまんな透。相当難易度は高いだろうが、死ぬなよ)

『言霊』の配置と、ボスモンスターの設定を担当したプログラマとして、晃は自分の作ったものを考え、遠くを見た。そしてその立场上、そして事件の性質上決して言葉にはできないが、思う。

(……………無理かもしれん)

今頃、どうなっているのだろうか？  
起きているのは、混乱か、それとも……………命をかけてまで、攻略なんてものをしている奴らがいるのか。

晃の記憶が正しければ、最初の階層の『言霊』のモンスターは、特にハードな造りにしてあったはずだ。  
物事は初めが肝心だからな、等と嬉々と設定をきつくした自分を今となっては殴りたい。

それを含め、考えれば考えるほど、あれを死なずにクリアするなど夢物語だと思う。特に……………中層以降にかけては。

おそらく、あの愚痴の多い後輩なら、勘弁してくれと叫ぶだろう。涙目になりながら、それが更に遊び心に火をつけるのに気づかずに。

そう思い当たり、本当に不謹慎ながら、晃は笑う。  
そして思う、それでも、帰ってきて欲しいと。

ビル街に、風が吹いていた。

何も出来ず、自分の構築したものが人を殺すかもしれないことに  
実感を持たず……。

晃は今日も一日を過ごしていた。

ただ、この悪夢が早く終わることを願いながら。

閑話 ある開発者の一幕（後書き）

以上、トールのボヤキに出てくるDSの先輩と、煙草1カートンで綺麗な風景を作ってくれた先輩たちのいる、現実世界的一幕でした。

一応

トール  
主人公 〓 透

DSの先輩 〓 晃

深淵の森のデザインでお願いした相手 〓 圭一

になります。わかりにくいと思いますが、失礼しました。

### 三話（前書き）

本当はこの後にすぐ書きたかった話が続く予定だった（というかこの話はそこまでのつなぎだったはず）んですが、合わせると量が微妙になりそうなので、先に投下することに致します。

おそらく後二時間ほどでもう一話投稿しますので、読んでいただけている方で、ちまちま読むのが嫌という方は少々お待ち下さいませ。

一応区切ってはあります……………間違いました、区切ったつもりです。

### 三話

【チュートリアル開始 20日後】

先輩を恨みながら、ローザに毒づきながら、『紅の平原』を『モコ』を連れて走りまわったあれから4日後、俺はギルド 銀の騎士団の本部になっている建物に来ていた。

「あ、トールくん」

建物の前にいた俺を見て、ちょうど買い物から戻ってきたらしいトウレーネが声をかけてくる。

出会って二日目、ものすごく丁寧な敬語で話してくるトウレーネに、どうにもむず痒くなった俺が、慣れないからできたら敬語はやめてくれないか、と言ったら、たどたどしい変な言葉遣いになって少し萌えた俺だ。

……きつと間違っていないと信じている。

まあ、その後さすがに、普通に喋りやすいままでいい、と言っただけだが、「さん」「は」「くん」になった。

これもまた……いや、自重することにしよう。

隣にいる、トウレーネよりもさらに小柄な女の子にも頭を下げられる。鈍色の髪を後ろ手にまとめ、歩くごとにその髪が揺れるのが可愛らしい。

あの後から、ローザの紹介でトウレーネと一緒にギルドの所有する建物に住んでいる、銀の騎士団所属の『アイナ』という大人しい

女の子だ。職業は『僧侶』、人選はさすがローザとでもいうか、トウレーネとはどうやら波長があったようだ。

ダンジョンに行く前に買い物に行ったり、食べ物を探索に誘ったりと、あんな事があり、普段はニコニコとしているものの時折暗い顔をするトウレーネに気を遣いつつ、あえて普通に接しているように見える、無口だが優しい子である。

「今日は早いですね。すみません、ちょっと待ってて下さい、すぐ用意してきます」

つられて頭を下げる俺に笑顔でそう告げると、トウレーネはアイナと建物に入っていく。

「……そんなに急がなくてもいいからな」

俺は、足早に去っていく後ろ姿に声をかけ、壁に近づきもたれなかった。

……まだ、そんな素直な笑顔を向けられると戸惑ってしまうが、さすがに三日目ともなると少しずつ慣れてきた。特に、ローザにいじめられた後などにそうされると、泣きそうになる。癒し成分が足りていないのだ、きっとあの人もトウレーネやアイナちゃん見習うといいと思う。

ゾク！

不意に背筋に寒気が走る。

恐る恐る、俺が本能が警戒を告げる方向、すなわち上を見ると……  
……ギルド本部、その三階の窓から、ローザが微笑んでいた。

(何……だと……、とうとう遠距離での読心術が……)

俺がその目線に静かに慄き固まっていると、面白そうに口元に笑みを浮かべ、ペコリと頭を下げて見えなくなる。明日には大事な一戦を控えているので、おそらく、これからフェイルと話し合いがあるのだろう。

ローザさん、俺は怖いです。モンスターに追われるよりもよっぽど貴方という人間が。

注) これは体験に基づいた事実です。

………気を取り直していこう、今日は行きたい所があるのだ。

さて、あの逃走劇の翌日から三日間、俺が何をしていたかという  
と、俺はバベルの塔第一階層の迷宮を調査マッピングしていた。

これは、『言霊』を封じた水晶を得ることができたため、バベルの塔の扉が開き、いよいよ上層への攻略が開始されたからである。

ただ、俺にとってそれまでと違ったのは、ソロではなかったという点。

俺は、トゥレーネやローザ、リュウ、ネイル、それにアイナといったメンバーとパーティーを組み、探査を行っていた。

ギルドではない俺と、幹部でもある二人が行動しているのか



という質問には、フェイルの許可は得ているので問題ありません、とあっさり答えられたので、その六人（このゲームにおける一番基本とされる人数が、六人なのだ）で行動していたのだ。

何でそういう事になったか、まずは順を追って話そうか。

あの、死ぬ思いをして走った日

俺が何とか指定された地点に『モコ』をおびき寄せると、ローザバインド・スクエアの用意したギルド所属の呪術師達が、その場に準備していた束縛陣で足止め、そして、ネイルを始めとする『火』属性の魔術師が用意していた詠唱を重ねて一気に焼き払うという見事な連携で、一瞬にしてかたがついた。つまり、死ぬ思いをしたのは俺だけ……しかしかも美味しいところは持つていかれた

俺は、開発者であることを知られたという事もあり、ローザに一つの提案をした。

それは転職クエストについての、おそらく現在は俺以外は知りえない情報。

現在、この【B a b y l o n】にいるプレイヤーは、皆基本職のままである。

生産職は、上位職がないため関係がないのだが（そもそも戦闘職とは比べものにならないほど、熟練度と呼ばれる技能の習得にかかる値の成長が半端無く遅い）、戦闘職にはそれぞれ上位となる職種がある。

転職クエストは、初めてバベルの塔を登った時に開放される『言霊』で言葉がわかるようになる、神殿のNPCから受ける事のできるクエストであり、これをクリアすることで、上級職への道が拓ける仕様になっている。

そして、これをチュートリアル期間のうちに開放し、上級職の戦闘に慣れることで少しでも生存率を上げるべきだと俺は提言した。

本来は、これはある程度街の外の初期のフィールドが攻略され、あちこちの情報が集まった後、第一階層の『ガーディアン守護獣』を倒すことで初めて得られる情報なので、どう伝えるか考えあぐねていたのだが、ローザに話したことで、フェイルの統率力もあり、今のうちに攻略を進める動きが出てきたのだ。

そしてその結果、その攻略部隊の一員に俺も加わることになり、更には元々言っていたように、トゥレーネのレベル上げも同時進行が良いという話が出たため、それならばと、面識のあるローザ、リユウ、ネイルの三人に、同居者のアイナを加えたパーティーが結成された。

第一階層からこれか、と頭が痛くなるようなトラシエフ罟等を抜け、上層へつながる広場が判明したのは先日のこと。

そして、ちょうど三週間目となる明日、『ガーディアン守護獣』に挑むことになり、今日は休養日とされた。

長かった。この四日間、俺は平原を追い回され、ダンジョンの性格の悪い罟の解除をし、歩いている途中は胃が痛くなったりもする（トゥレーネは何故か俺などに笑顔で好意を示してくれる　俺はあたふたする　ローザ達からかいの微笑　俺胃痛）し、中々大変だった。……………正直、それでもソロでいるよりも、楽しかったがな。

そんな中、ようやく俺は四日前の目的を果たせる時間ができたのだ。

そう……聞いてくれ！ 今日こそは、待ちに待っていた、『煙草』を錬成してもらったための素材を取りに行くのだ！

………あれ、反応薄い？

いや、そんな目で見ないで聞いてくれ。

近頃世間の目は厳しいが、この中でなら吸い放題……もちろんマナーは守る。

どんなに吸っても現実の体には影響はないし、現実ほど吸う場所や捨てる灰皿を必死に探し求める必要もない。何故ならアイテムは使つと消えるから………考えた奴は天才だ。

完全に自分のための用事だったため、本当は一人で行くつもりだったのだが、その話をしたところトゥレーネも一緒に行ってくれるということになり、こうして今日も迎えに来たのだった。

ちなみに、どうやら三日間行動を共にした人間の中では喫煙者は俺だけのようで、それを聞いた時、俺はリュウさんに裏切られたように感じた。………何故、何故俺なんかよりタバコが似合いそんな外見の貴方が健康志向なんですか、リュウさん！、その話に乗ってくれたのはトゥレーネだけである。

「お待たせしました！」

俺がそんな回想にふけていると、扉が開き、トウレーネが建物から出てきた。

ニッコリと笑って言う。

「二人でどこかに行くのって初めてですよ？ 私も頑張ります、前衛よろしくお願いします」

そして、ぐっと拳を握り締めるように気合を入れ、そう言ってさくさく歩き出す。 前衛のはずの俺を置いて。

「ちよ、待て待て、張り切り過ぎだって、第一場所わかってないだろ!？」

そう言って、慌てて俺も後を追うのだった。

### 三話（後書き）

本来は閑話みたいな文章が作者にとって自然に書きやすい文章なんです。軽く重くで書きたいので、日々試行錯誤中。

変な部分もあるかと思いますが、取り敢えず話を進めます。ありがとうございます。

## 四話（前書き）

10/24 連続二話程更新致しました。よろしくお願ひします

## 四話

ここは、『バベル』北東に抜けた先にあるダンジョン、『無名の遺跡』。

この奥にある、『火』属性の魔石アイテムが、『煙草』の錬成に必要なという事で、俺はトゥレーネを伴い先へと進んでいた。

レベル的には、現在開放されている中では、難易度中のレベル。この三日間、結構な時間を『バベルの塔』内部で過ごしていた俺達にとっては、決して楽では無いものの、無理さえしなければそこまで危なくもないダンジョンだ。

古びた石柱が立ち並び通路を超え、崩れた壁を迂回し、遺跡の中に入ると待ち受けている罠を解除しながら、少しずつ奥へと進む。ここまで何の問題もなく進めていたが、そろそろ最奥部が近いため、モンスターも強くなってくるはずだ。

そろそろ罠も多くなってくるし警戒を、と俺が言いかけたその時、

カチリ

「あ……………」

物珍しげに壁に手をおいたトゥレーネが、乾いた音の後、少し間の抜けたような声を出す。

続いて、石と石がこすれるような、鈍い音。

「……………ごめんなさい」

トゥレーネの声が細く響く。

少しだけ、声をかけるタイミングが遅かったようだ。

今俺達がいる遺跡内の通路。

不思議な光沢を放つ石でできた壁には、幾何学的な文様が刻まれている。

（難しかったって言ってたなあ、これを表現するの）

少しだけ、現実逃避を試みる俺。

そうしているうちに、鈍い音が終わり、一部分が凹んだように動いた壁の中から、石兵型のモンスターが現れる。

壁のある位置に触れると、現れるような仕様になっていたらしい。幾何学模様のせいで、罨の場所を見逃してしまった俺のミスだ。

……………一応、あまり壁とかに触れないでって言ったんだけどなあ。しかし、ある意味褒めよう。

その、目の前のモンスターを見て、そう思う。

俺たちの前に立ちふさがったのは、『レムナント・ゴレム古代機兵 L V ・ 18』。

こいつは、男のロマンに固執した俺の会心作だ。目の前で威嚇してきていなければ細部にわたり自慢するところだが。……………やっぱりこういう風に見ると違うなあ、等と考える。

巨大だ。

頭が通路の天井に届こうかという巨体。

なめらかなフォルムにして無骨な石の光沢。

そして、画面で見るのであればわからないであろう威圧感をひし



ひしと肌で感じる。

やべーかつけー。

何で俺、無機物系は捕獲テイムできない仕様なんかにしたんだろう……  
痛恨のミスだ。

このゲームでは、特定のモンスターと戦闘し、倒した場合、超低確率で捕獲テイムすることが出来ることがある。モンスターにはそれぞれ特徴があり、治癒効果を持つものであったり、支援効果であったり、戦闘参加であったりと様々だ。

ああ、このゴーレムに乗ってフィールドを歩いてみたかった……  
……。

そんな事を思う間に、ゆっくりとその足音を響かせて『レムナント・ゴーレム古代機兵』  
が近づいてくる。

今俺がソロでいるならば、時間をかけてヒットアンドアウェイで削っていくか、さっさと逃げ出すところだが、今は背後にトゥレーネがいる。

仲間がいる。………しかも美人の。

おそらく性質にもう一つ空きがあれば、『見栄』が入っていたかもしれない。

遺跡に入る前にトゥレーネにかけてもらっていた支援効果と秘密スキル（注意 そんなものは存在しません 運営チームより）『男の見栄』を受けた俺が、いつも以上の速度で、相手に小さく攻撃しながら注意をひきつける。

太い腕が俺を襲う。速度はあまりないが、動きが厄介だ、食らえ

ば一撃でもかなりのHPを持って行かれるだろう。注意しながら、タイミングを縫って攻撃を浴びせていった。

その間に、背後で、聞きなれてもなお、聴き惚れるような綺麗な声<sup>1</sup>が滔々と響き始める。

俺にとっては援護となる、目の前にいるこいつにとっては死へ向かう詩。

『私の声が聞こえますか？』

『戦いに赴く人を助けたいの』

『私の声を聞いてくれますか？』

『共に終わり導く歌を歌いましょう』

『そんな私の声を風に乗せて届けて』

『ファウエルクテス・ホーム  
減衰の詠歌』

数節の詩の終わりと共に、影色の風が眼前の敵にまわりつき、目に見えてゴーレムの動きが鈍くなる。

（作成時間72時間の愛しき我が子よ、最後に綺麗な声を聞かせたトウレーネに感謝して眠れ）

俺は心の中で目の前のゴーレムにささやき、先ほどまではその腕が邪魔で狙えなかった額の石を狙って飛ぶ。

数秒後、その巨軀に見合う大きなライトエフェクトと共に、ドロップカードを残して影は消えた。

「やりましたね、ツールくん！」  
いいタイミングで相手の動きを止めてくれたトウレーネが、声をかけながら駆け寄ってくる。

「ああ、いいタイミングだった、ありがとうな」  
俺も、そう言って笑う。

正直、大人数でのパーティ行動やソロには慣れていたが、二人でダンジョンに潜るというのは経験が少ない。

それも、目を引くような美人となんてなおさらだ。むしろ少ないと言っか、無い。

あれ、よく考えてたら、俺近頃恵まれ過ぎてない？  
これってフラグ立ったりしてないよな？  
まさか俺……死ぬのかな？

そんな事を半ば本気で思っくらい、近頃調子のいい俺だ。色々愚痴って入るが、最初の二週間に比べて恵まれすぎていると感じる。俺の内心などには気づかずに、トウレーネが笑顔を向けてくる。

(何で、俺なんかをそんなに信用するのかなあ)

例え、あの状況で助けたとはいえ、何でだろう。心から不思議に思う。気になってこっそり尋ねたところ、ローザやアイナなどには冷たい微笑と困ったような微笑ではぐらかされた。どっちがどっちかは……………言わなくてもいいよな？

そろそろ目的のものがあるはずの、最奥部手前の広場に着く。帰りは転移で街に戻れるため、もうひと踏ん張りで終わりだ。

ふう、と一息ついて回復アイテムである『治癒薬』を復元する俺。味は100%オレンジジュースの味である。

ちなみに、MP回復用の『治療薬』はやたらと甘い為、順番を間違えると非常に飲みづらい。味音痴の後輩に、飲み物タイプのアイテムを作らせた先輩が悪い、きつと……………そして、理解<sup>わか</sup>ってて敢えてそうしたんじゃないと信じたい。

そんな事を考えていた時、俺の索敵<sup>サーチ</sup>に、また新たなモンスターが引<sup>ひ</sup>きかかった。随分と近い。

そして、気配が近づいてくる方向に目を向ける。  
トウレーネも気がついたようだ。

その姿を見て俺は心のなかで歓喜の声を上げる。

（おお！ ここに来て黒影虎、確か結構肉がうまい設定で、ドロップするんだっただはず）

しかしLvが低くて良かった。今は、少し大きな黒猫のような外見だが、こいつはLvが高くなると文字通り虎になる。

しかもピンチになると影に潜る強敵である。こいつは、モデルが実在の動物であったりしたため、結構作成時間は短かったが、成長する要素を持つレアなモンスターだ。

だが今なら、簡単に倒せる上に旨い肉を得られるかも……

そう思った俺が、有無をいわず先制攻撃を仕掛けようとした時

ファーストアタック

ゴッ！

背後から結構な衝撃が走った。仲間からの攻撃でなければ、HPが数ドット削れていたことだろう。

そしてよるける俺の横を人影が走り抜けた。

一瞬スタンしかけた俺は、その衝撃をもたらした主、味方のはずのトゥレーネに恨みがましい目を向ける。

「……お前、何を……」

俺の言葉を聞かず、トゥレーネが言う。何故か憤っているように見える。

「……ツールくん！　こんな可愛い子に何してるんですか！」

……………えっと、はい？

俺を背後から不意打ちしておいて、どんな言い訳が返ってくるのかと思えば、何故か怒られている俺。何でこうなってる。

「弱いものいじめする人だとは思ってませんでした！」

ポカン、とした俺に、やや涙目で訴えてくるトゥレーネ。

やばい、可愛いかもしれん。そんな風に思考がそれるが、しかしそれでも内心でツッコむ。

いや、トゥレーネもさっきゴーレム倒すのは手伝ったじゃん。ここまででも相当のモンスター倒したぞ？

何か？　見かけが可愛い猫はダメで、ゴーレムはいいのか？

そんな数時間で描き上げた猫の方が、俺の3日間の徹夜の集大成レムナント・ゴーレムたる『古代機兵よりいいと？

ん？　っていうかおい黒影虎、お前何トゥレーネになついでんだよ。

戦いもせずタイムに捕獲っておかしいだろ？

俺がそんな事を呟くと、トゥレーネがずっと自分のメニューを開き、指差す。

『黒影虎は、仲間になりたそうにこっちを見ている』

……とはさすがに出ていなかった（当たり前だそんな仕様は作っていない）が、捕獲した旨の表示が出ていた。

何故だ？

俺は疑問に思いながら、何故か戦わずして仲間になったらしい『黒影虎 Lv.3』を見た。

トゥレーネの腕に抱かれて、柔らかい感触に気持ちよさそうにしている。……羨ましいとか思っていないんだからな。

まだ怪訝そうな俺に、トゥレーネがちよいちよい、と手招きし、自分の性質と、パーティのステータスを見せる。  
指さされている部分を覗き込むと

### 【トゥレーネ】

性質：

『純真』<sup>タイム</sup>（効果：被支援効果アップ。稀に戦闘なしでモンスターを捕獲する 0.1%）

『濃厚』（効果：雪原ダンジョン・フィールドでの状態変化・『凍結』防止）

『歌姫』（効果：呪文・詩、詠唱時効果三倍）

【トール】

技能（パーティ全体に効果アリ）：『幸運』、『闇系モンスター捕獲率アップ』

……………マジですか？ 0.1%？ 何その幸運、何のフラグ？

『黒影虎』はトゥレーネを飼い主と認定したようで、静かにその影の中に潜り込み、顔だけだしてこちらを見ている。

何故同じパーティの俺が警戒されているのかはわからないが。

「もう、いじめちゃ駄目ですからね」

それを見ていた俺は、トゥレーネに念を押され、疲れたように頷く。

「いや、さっさと取るもん取って帰ろう。」

【B a b y l o n】ログイン20日目、どうやら可愛い黒虎がパーティーに加わったようです。



#### 四話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
拙作ですが、今後とも宜しく願います。

ちなみにどうでもいいですが、作者は猫派です。

犬には吠えられます……何故か散歩中の犬にまで吠えられたことがあります。飼い主がびっくりしました。

注意：決して不審者ではありません。

## 五話（前書き）

今回は三人称です。

何故か？ それは、この場面のメモ書きをどうしてか三人称で書いていたからです……というのは理由の半分で、他の人達を主人公の目線以外から出したかったからです。

## 五話

【～第一層ボス攻略前日、銀の騎士団ギルド本部～】

「トールのやつとトゥレーネは、もう遺跡に向かったのか？」

『シルバース・ナイト銀の騎士団』の本部三階では、ギルドの面々が、明日に向けての話をしていた。

そして、その話し合いも一段落した所で部屋に入ってきたアイナに、リュウが尋ねる。

「……はい、トゥレーネさん、凄い張り切っていました」

リュウの言葉に、と先ほどまで一緒に買い物に行っていたアイナがコクリと頷く。

「そうか、トールのやつもちったあ男らしくしてるといいがな。

……いつまで経っても照れてばかりいやがって、どっちが男だかわかりやしねえ」

がはは、とそれを聞いてリュウが笑う。

最初は、少し怯えていたアイナも、話していくうちに、その外見とは裏腹に面倒見がよく、ぶっきらぼうながら優しいリュウの顔を直視できるようになっていた。

「でも、二人共、優しいです」

そう呟いたアイナの頭を、リュウがくしゃっと撫でる。

節くれだった、固く、暖かい大きな手だ。

最初はそうされる度にビクツツとしていたアイナだったが、今では

そうされる事に少し落ち着きすら感じている。

(何か、お父さんに似てる)

そんな事を内心アイナが思っていると知れば、意外と繊細なこの大男は傷つくかもしれないが。

「……………そうですね、一人は甲斐性なし、一人はよくわからない天然の娘ですけれど」

今頃ぎこちなくなっているであろう二人を思い浮かべて、ローザが淡々とそう言った。

「あはは、それはまた随分なお言葉だねえ。もつとも、僕も否定はしないけれど」

ネイルがその言葉を聞いて、肩をすくめて苦笑する。いちいち行動が大げさなのにはもう誰も突っ込まないが、常々変わらないところを見ると、この状態が素なのだろう。

今、ここにいるのは四人。

出かけている二人とパーティを組んでいるメンバーだ。

おそらく、戦力のバランス的にも、明日は最前線に立つパーティの一つになるだろう。たった三日ではあつたが、相当な時間を塔の探索に費やし、即席ながら各々の癖などもわかってきていた。

団長のフェイルはというと、今他のギルドとの調整に向かってい  
るため、不在だ。

元々休養に当てる為の一日でもあり、ツールとトゥレーネは、正  
式にはギルドのメンバーではないことと、あれ以上、ギルドの錬金

術師の一人が開発した『煙草』を我慢させると、鬱陶しそうという理由でローザが呼ばなかった。

今日はそこまで重要な話し合いでもない、あくまで確認のためのものだ。

それに　　まだ聞かせたくはない話もある。

「後で、フェイルが戻ってきたら改めてお話ししますが、キャルから『犯罪者』プレイヤーを転送するためのアイテムができたと報告が来ていました。……………あの娘は、まだうなされるのでしょうか？」

ローザがそう口を開く　　後半は、アイナに向けて告げた言葉だ。

「はい…………でも、最初の一日に比べたら、全然ましです。あの日は、眠れなかったみたいだから」

「そう…………リュウの言う通りにして正解だったかもしれないね」  
トウレーネは、いつもにこやかにしているため、人を見ることに長けているローザですら鈍感なだけかと思っていたが、同居しているアイナによると、初日は夜中にうなされては目をさまし、一睡も出来なかったらしい。

それでいて朝皆の前に姿を現した時にはあの通りなのだから、その話をアイナから聞き、逆に意外に思ったものだ。

そして、それを聞いたリュウがこう提案した。

「悪夢なんて見る暇もないほど連れ回せばいい。考える余裕がなくなるほど限界まで疲れさせて、腹一杯にしてベッドに放り込みゃ、そのうち時間が解決してくれる。後はトールのやつの仕事だろ」

乱暴すぎるように思われたが、効果の程は十分だったらしい。

（まあ、騎士様役があんな感じの方ですからね、確かに荒療治もありだったのかもしれない）

そう内心で思い、ローザが口元を緩める。

「……意外だね。ローザはああいう可愛い感じの娘は嫌いそうだけど、もちろん、悪い子ではないと思ってるけどね、僕は」  
その様子に、ネイルが本当に意外な口調で尋ねた。途中からの言葉は、少し睨んできたアイナに対してである。

この無口な少女は、初日トウレーネにいきなり抱きしめられて可愛がられた時は目を瞬かせて戸惑っていたが、それからも一緒に過ごす、というか構われるにつれて、短い期間ながら驚くほどよく懐いている。

ネイルには、それが現実にいた頃からののか、こんな状況に巻き込まれたからなのかは分からないが、ほとんど自分からは口を開かなかったアイナが、曲がりなりにも自分から意見を言ったのは、トウレーネがうなされていることをここに居る三人と団長であるフェイルに告げた時だった。

「あら？ 私は元々可愛い物を愛<sup>め</sup>でるのは好きですよ。………もしあれが、計算したような天然もどきでしたら別ですけれど」  
そうネイルに言って、ローザが微笑む。

何故か、何かを思い出したようにイラッとしたように見えるのは………きつと触れないほうがいいのだろう、そう思ったネイルが、更なる疑問を口にする。

「何で純正の天然って解るのさ？」

それを聞いたローザが、端的に告げた。

「躊躇なく地雷を踏めるのは、本物の天然だけです。計算高い女性には、あれほど危険な罠を、躊躇なく発動させません。………それに、それが自分に振りかかりさえしなければ、可愛らしいじゃありませんか？」

ああ、とそれを聞いて三人とも納得する。

その後始末を全てツールに押し付け、それを何とか解決したところをトゥレーネに涙目で謝られたツールが照れ、そしてローザが遊ぶ、というパターンが三日間ダンジョンで繰り広げられたのをこの面子は知っている。

それを見て、リュウが笑い、ネイルが肩をすくめ、アイナが静かに微笑むのもまた、定番になっていた。

「きつと今頃、また嬢ちゃんが罠を発動させて、ツールが現実逃避してはカツコつけて頑張ってるんだろうぜ」

そのリュウの言葉に、四人とも笑う。

明日攻略に望むながらも、そんな柔らかな雰囲気の下がりだつた。

【第一層ボス攻略前日、夕方】

遺跡から戻ってきた後、クロ（黒影虎はそう名付けられたらしい……あれ、そのうち虎になるのに）の食べ物を買うのです、アイナちゃんにも見せるのです、と張り切って（何故あんなに元気なんだ……？）いるトウレーネをギルドまで送り届けた俺は、『煙草』の素材を渡すためにローザから紹介された錬金術師の店に入り、それを見て固まった。

もしかすると、他の人間にとってはそうでもないのかもしれないが、開発者の俺にとっては、ありえないと解るもの。

その少女にも、背の低い大人の女性にも見えるプレイヤーのアバターは、燃えるような赤い髪に、茶色の大きな目をしていた。

まだそれだけなら、この世界では決して珍しくはない。

俺を固まらせた原因は、その顔に付いているとがった耳、そして明らかに人の体には着いていないもの。

「少し変わった人間ではありますが、腕は確かな『錬金術師』です」

「キヤルさんは、とても可愛らしい方です！」  
ローザと、既に会ったことがあるらしいトウレーネは、そう紹介していたが、予想の斜め上過ぎる状況に、混乱した俺は内心で全力でツッコむ。

（何でだ！？ 何で猫耳にふさふさの尻尾のアバターなんかいるんだよ！ バグか？ それとも誰かの隠し仕様か？ ……いか



ん、思い当たるフシがありすぎる)

遺跡で、色々と精神的にも肉体的にも疲れ果てた俺を迎えたのは、現実の容姿を変更すること位しか許されていないはずのこの世界で、何故か猫耳をはやし尻尾を垂らした女性が座っている道具屋だった。

## 簡易登場人物パラメータ2

### 【ネイル Lv.29】

職種：魔術師

主要武具：ロッド

属性：炎

性質：自己犠牲（パーティの誰かが瀕死時、HPを分け与える事ができる）、自己陶醉（自分への支援効果アップ）、厨二病重症者（HP1/4時、魔力暴走効果）

### 【アイナ Lv.27】

職種：僧侶

主要武具：杖

属性：無

性質：内向的（回復呪文時、自己回復）、無口（無詠唱時効果ダウン軽減）、????



## 五話（後書き）

まだ出していなかったキャラ二人の簡易紹介です。  
二章終了後、人物設定をどこかに置く予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5889x/>

---

Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

2011年10月25日23時35分発行